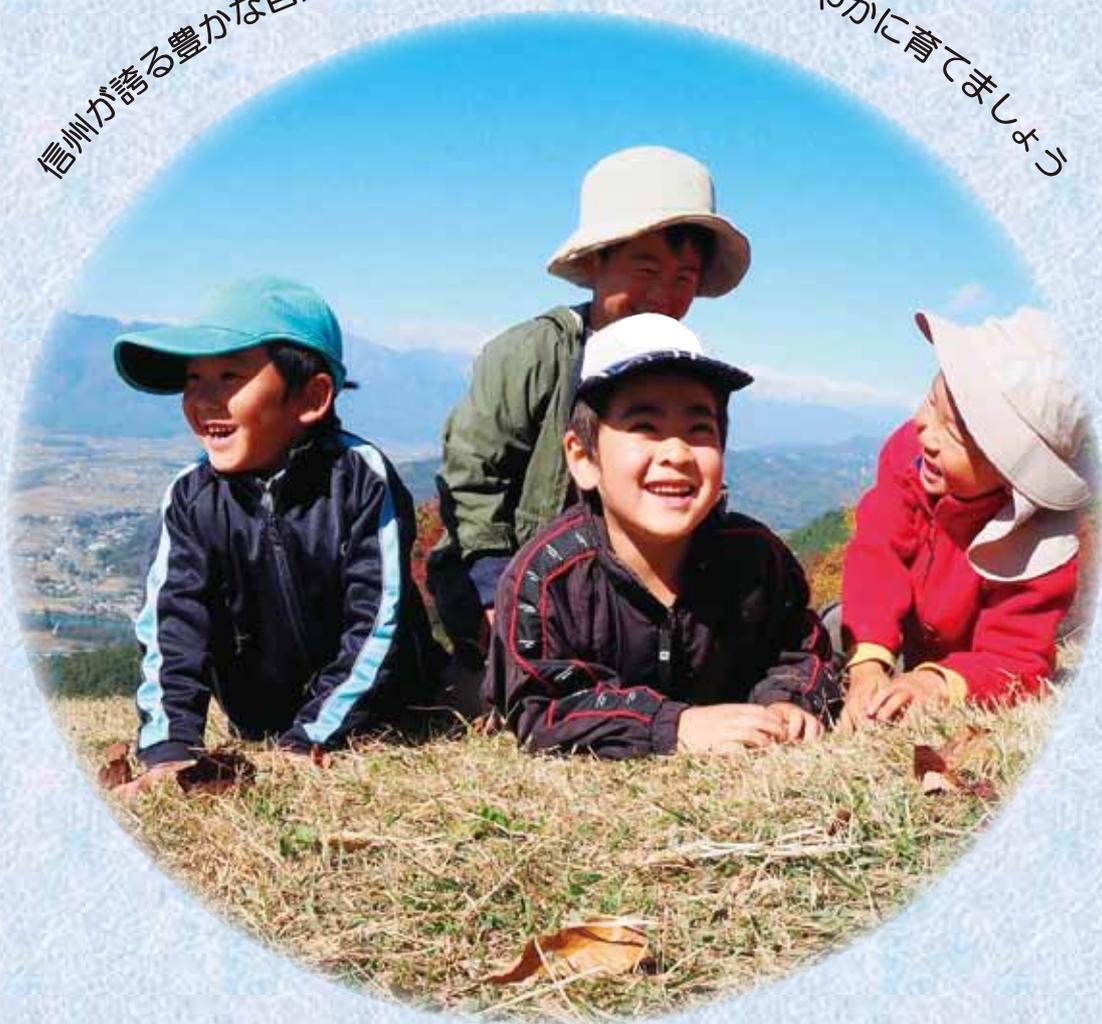


信州型自然保育ガイド

信州が誇る豊かな自然環境の中で、子どもたちをのびやかに育てましょう



しあわせ  信州





目次

特集 「信州型自然保育認定制度」が拓く子どもの未来・・・・・・・・・・	1
-------------------------------------	---

事例紹介編

信州に広がる自然のフィールド・・・・・・・・・・	7
自然の中で子どもが触れる多様な素材（テーマ）・・・・・・・・	8
テーマ別事例紹介	
土と関わる活動・・・・・・・・・・	9
花・草・木と関わる活動・・・・・・・・・・	13
水と関わる活動・・・・・・・・・・	19
空・天候と関わる活動・・・・・・・・・・	23
生き物と関わる活動・・・・・・・・・・	27
火と関わる活動・・・・・・・・・・	33
人・地域・文化と関わる活動・・・・・・・・・・	37

安全管理編

リスクとハザードの考え方・・・・・・・・・・	45
参考資料・・・・・・・・・・	47

資料編

屋外で活動する際に便利な道具・・・・・・・・・・	53
屋外へ出かける時の子どもの格好・・・・・・・・・・	54

信州型自然保育検討事業報告編

信州型自然保育検討委員会・作業部会・・・・・・・・・・	57
現地視察先・・・・・・・・・・	58





鼎談：「信州型自然保育認定制度」が拓く子どもの未来

◎山本京子（長野県 県民文化部 こども・若者担当部長）

◎上原貴夫（信州型自然保育検討委員会 委員長／長野県短期大学 教授）

◎依田敬子（信州型自然保育検討委員会 委員／NPO 法人響育の山里 くじら雲 代表）

「信州型自然保育認定制度」がスタートすることとなりました。「信州型自然保育」とは「信州の豊かな自然環境や地域資源を積極的に活用した、屋外での多様な体験活動を基軸とする保育」のことを指します。長野県が全国に先駆けて、自然環境を活用した保育を積極的に促進するために認定制度を創設したことの意義について語っていただきました。

《信州型自然保育検討委員会を振り返って》

山本

いよいよ「信州型自然保育認定制度」がスタートします。この制度は「信州型自然保育検討委員会」での議論を踏まえて創設されたわけですが、お二人には、検討委員会メンバーとして一年間の御議論、本当にありがとうございました。

上原

この検討委員会は、保育者養成校の先生方、野外での保育実践者、保護者、自治体関係者のほか、長野県保育園連盟や長野県私立幼稚園協会の関係者で構成されていましたよね。これが非常によかった。日頃、いろいろな立場から保育・幼児教育に関わっている方々が、長野県に住むすべての子どもたちが信州の豊かな自然環境や地域資源の中で健やかに育ててほしいという共通の願いのもとに議論をしてきたわけです。その願いが、すべての保育・幼児教育に関わる団体がみんな参加できる認定制度というような、他の県では例を見ない先進的で画期的なスタイルを生みだしてくれたのではないのでしょうか。

山本

はい、そうですね。長野県は県土の78%が森林ということもあり、どの施設の周辺にも緑がいっぱいありますよね。野外保育を行っている団体だけでなく、幼稚園や保育園でも、園の周辺の自然環境を取り入れた保育に親しみをもって行ってきたという実績があって、それこそ長野県の幼児教育の素晴らしいところではないかと私は思っています。認定制度をきっかけとして、こうした取組がもっと身近になることを期待したいですね。

それから、長野県は南北に長くて、地域ごとに標高差もありますよね。この豊かな自然のもとで多様な地域文化が存在しているということですよ。

依田

私の「くじら雲」では、十日夜など古くから伝わる地域の行事を子どもたちとともに体験しているのですが、県内のどの保育施設でも地域との交流を大切にしている、それが長野県の幼児教育の豊かさや独自性につながっているのだと思います。

《信州型自然保育検討事業の背景》

上原

そもそも、なぜ県として自然体験を積極的に取り入れた保育活動を「認定」する制度を作る必要があるとお考えになったのですか？これは是非、聞いておきましょう。

山本

いま、子どもの自己肯定感の低さやニート・ひきこもりの問題が指摘されています。私たちは、こうした問題へのあしがかりの一つとして、幼児期の過ごし方が極めて大切だと考えました。子どもが自己肯定感を得るためには、子ども一人ひとりがその特性や能力に応じた出番を与えられ、認めてもらえる経験を重ねることや、居場所の保障が不可欠だと思っています。その一つのアプローチとして、「自然保育」というものに注目しました。

《自然保育とは》

山本

「自然保育」って何を指すのかは、これまでの検討委員会で熱心に議論されてきましたが、一年間の議論を終えて、改めて、お二人のお考えを聞いてみたいです。

上原

私は野外でのキャンプを継続的に行っていますが、自然の中って子どもが存分に個性を伸ばすことができますよね。木登りが得意な子もいれば、虫を探すのが得意な子もいるのですよ。どんな子にも役割や出番があって、それぞれに輝いているというか。それって素晴らしいことだと思いますね。

依田

自然には、子どもの興味や感覚を刺激するものがたくさんあります。自然の中で、子どもは自分の発達段階に必要な刺激を自分で選択します。五感を働かせて、自然物の概念を自ら築くというような感じがします。試したり、考えたり、友達と力を合わせたりして、さまざまな可能性を見いだしたり。このような経験の中で子どもの主体性や自主性、達成感が生まれるのではないのでしょうか。また、共感する友達や見守る保育者により、コミュニケーション能力や自己肯定感が育まれると思います。そのためには、子どもがゆったりと活動し、じっくり考える時間を保障することが必要ですし、大人が安全面に配慮しながら、見守り、待つ姿勢がとても重要です。

山本

はい、おっしゃる通りですね。私たちは、子どもたちの主体的な体験活動が幅広く行われるためには、屋外での自然体験を基軸とした保育が一定時間保障されることが重要なんじゃないかと考えました。その観点から、このような保育活動を、県として「認定」することで、積極的に応援していこうと思っています。

《信州型自然保育認定制度について》

山本

今回、二つの認定の区分（タイプ）を設定したのですが、一日の保育時間のうち大半を屋外で過ごすことで、たっぴりと自然体験を行うタイプと、屋外での自然体験活動を大切にしつつも、それ以外のさまざまなプログラムにも重点を置くタイプの二つ。県としては両タイプとも等しく推進していきたいと思っています。

上原

県に「認定」されることで、質の保証ということをめざすものでもあり、その意味では導入する園には一層の責任が必要となりますね。また、自園の保育のすばらしさを多くの人に知ってもらうチャンスにもなりますよね。これまでは各園、各施設ですばらしい実践が行われていても、あまりお互いに内容を知ることができなかったのですよね。これは非常にもったいない！

山本

そうなんです。各園でどんな保育実践を行っているのかが見えるようになる——「見える化」ということは、保育者にとっても、また、保護者や子どもにとっても大きなメリットです。長野県全体の保育の質の向上にもつながります。

《信州型自然保育ガイドについて》

上原

今回、認定制度と並行して公開される「信州型自然保育ガイド」が果たす役割も、この制度にとって重要です。このガイドでは、自然環境や地域資源を活用した保育を実践する上で、参考となる情報や実践事例を紹介しているのですが、このガイドを通して、そうした保育に対する理解を広げ、さらに、日頃の保育のイメージを広げてほしいと思っています。

依田

このガイドには、土や水、草花、生き物とか、自然の中に存在しているたくさんの要素との関わりの中から、子どもが会うさまざまな体験や気づきが、テーマ別に整理されているのです。事故防止や安全管理の観点からも、野外で活動する際のポイントがコンパクトにまとめられている点も素晴らしいですね。もちろん、実際の保育は、このガイドにマニュアル的に従えばよいというものじゃなく、それぞれの園の方針や環境に基づいた工夫が必要です。そこに注意が必要です。

上原

そうなんです。その点は、ガイドを作成する作業部会でも議論になったし、大事にしたいことですね。このガイドはあくまで、自然の中で子どもがどんな体験をし、何を考えるかということについての「ヒント」を示すものにすぎません。ここは是非、間違えないでいただきたい。ガイドを糸口にしつつも、各団体の特色を活かした自然保育を見つけてほしいと願っています。

依田

自然の中で子どもの自発的な体験を大切にしていくためには、子どもに寄り添う保育者が、一人ひとりの子どもの体験を丁寧に受け止め、それぞれの興味関心を伸ばしていく視点をつねに持って関わる姿勢が重要です。自然に対する観察力と一緒に、子ども理解についても深い見識が必要です。その意味で、自然保育に関わる保育者の資質をどう高め、実践の中でどんなふうにスキルアップしていくかということも、これから議論していく必要があります。

上原

ガイドはあくまで手引きであって、結局は、それを使う保育者の子ども観や保育観が大切ということですね。短大などでの保育者養成課程の中にも、自然保育に関する内容を取り入れたり、卒業後の研修を定期的に行ったりすることも、今後必要になってくるのかな。

《子育て支援という観点から》

上原

県内だけでなく都会からもこの「信州型自然保育」に関心をもってくれる人が大勢いると思います。僕の知り合いにもそういう人たちがいっぱいいますよ。山々に囲まれた長野県の大自然の中で、ゆったりと子育てをしたいと思う子育て世代の方は、ど

んどん長野県に移住してきてもらえたら嬉しいですね。

山本

私も子どもを育てましたが、長野県は、身近に豊かな自然環境や地域資源があって、子育て環境として最適ですね。

上原

保護者にとっても、二つの認定のタイプがあることで、自分のイメージに近い保育の場を選ぶことができますよね。一日のほとんどの時間を自然の中で体験活動をして過ごすタイプの団体を選ぶもよし、屋外での自然体験を大切にしつつも、それ以外の活動にも幅広く取り組んでいるタイプの施設を選ぶもよしてことですよね。

依田

保護者にとって、幼児教育の選択肢が増えるということは大事だと思います。自分の子どもに合った幼児期の過ごし方を考え、ふさわしい環境を与えることができますね。

上原

まさに「子育て先進県なの」ですね。

《今後について》

山本

これから認定団体を中心として、「信州型自然保育」の事例がたくさん県に寄せられることで、この制度の内容が充実し、長野県全体の保育や幼児教育のレベルがますます向上してほしいです。楽しみです。

上原

1年間の長い議論を経て、ようやく認定制度の創設というスタート地点に立ちましたね。僕が思うに、この制度をこれから大きく育てていくのは、幼児期の子どもの育ちに関わっている県民の皆さんお一人おひとりの力なんじゃないかな。「信州型自然保育」の理念がたくましく力強く長野県に根を張っていくことができるように、僕も県民の皆さんと共に期待したいと思います。



事例紹介編

信州に広がる自然のフィールド



自然の中で子どもが触れる多様な素材（テーマ）



空・天候

(23 ページ)



火

(33 ページ)



人・地域・文化

(37 ページ)

花・草・木

(13 ページ)



生き物

(27 ページ)



水

(19 ページ)



土

(9 ページ)

土と関わる活動

土は植物を育て、さまざまな生命を育む源です。子どもたちは泥んこあそびが大好き。どろどろ、べちゃべちゃと泥をこねる感触自体も楽しいですが、いつしか粘土をぎゅっぎゅっと丸め、少しずつ硬くまーるくして、さらさらの白い砂をかけて、ぴかぴかに磨きあげる泥団子づくりへと発展していきます。お日様のあたる田んぼの中に裸足で入ってみましょう。生温かい泥が足の指の間からにゅるにゅると出てきて、なんだかくすぐったいね。土を耕すと、いろいろな生き物が飛び出していきます。ミミズやもぐら、蟬の幼虫も暗くてあたたかい土の中で過ごしているんだね。畑に苗を植えるまでには、ごつごつした硬い土に何度も鍬を入れ、やわらかいベッドを作るように、土の中にふんわりと空気を入れなければなりません。土と向き合いながら畑を耕し、田を作ることは、私たちの暮らしの大切な土台なのです。

土の多様な関わり方

- 砂で山を作る／トンネルを作る
- 砂に水を流して泥遊びをする
- 泥団子を作る
- 土や砂をふるいにかけてさらさらにする
- 泥や土をプリンなどの型に入れる
- スコップで土を掘る／鍬で畑を耕す
- 田んぼに入る
- 粘土をこねる／陶器（焼き物）を作る
- 砂に指や枝で絵を描く
- いろいろな形や大きさの石を集める
- 石に絵を描く

土がもたらす五感への刺激

- 手で泥をこねる感覚を楽しむ
- 土を手で丸め固めることを楽しむ
- 裸足で土や泥の上を歩く感覚を味わう
- 砂のさらさらした感触を楽しむ
- 砂を固めたり崩したりすることの繰り返しを楽しむ
- いろいろな石や砂の硬さの違いを感じる
- 乾いた土や濡れた土の色の違いを楽しむ
- いろいろな石の音の違いを楽しむ
- いろいろな石の色、形の違いを楽しむ
- 石や砂の重さを感じる

土と関わることによる気づき

- 土に水を加えるとさまざまな硬さの泥になることを知る
- 土の性質（粘り気）によって固まりやすさが異なることを知る
- ふるいにかけると粒子の大きさが異なる土や砂、小石に分かれることを知る
- 鍬で土を耕すことによって作物を育てるのに適した状態になることを知る
- 土の中にさまざまな生き物が暮らしていることを知る
- 粘土を焼くと陶器ができることを知る
- 掘った場所や深さによって、水が浸透しやすいもの、浸透しにくいものなど異なった性質の土が出てくることに気づく
- 拾った場所によって石の形や大きさ、重さ、色などが違うことに気づく
- 野菜や植物、木には、土が必要であることに気づく
- 土の中で分解されて無くなってしまいう物（自然物・有機物）と、いつまでも残ってしまう物（人工物）があることを知る



土と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- ・土や砂に触り、感覚を楽しむ
- ・泥水の感覚を全身で味わう

○3歳

- ・土を手のひらの中で丸めたり、山を作ったりして、土の形の変化を楽しむ
- ・容器に入れた砂や泥を、食べ物やジュースに見立てて遊ぶことを楽しむ
- ・きれいな石を集める（形、色、重さなどを感ずる）

○4歳

- ・土や泥の中にミミズやタニシなどの動物がいることに興味を持つ
- ・硬くて光る泥団子を作るにはどうすればよいか考え、工夫して作ることに取り組む

○5歳

- ・土を耕したり肥料を与えたりしながら作物を育てることに取り組む
- ・粘土をこねて形を作り、陶器を作ることに挑戦する

大人が子どもに伝えたい土との関わり方

◆土壌を豊かにすることは、森林を豊かにし多様な生き物を育てることになる。

◆森が豊かになればますます土壌は豊かになり、水源涵養機能も高まる。また、豊かな土壌により川や海の生き物も増える。さらには、こうした豊かな土壌が、さまざまな災害から人間を守り、人類の課題である環境問題にも重要な役割を果たしていることを、子どもにわかるように伝えていきたい。

◆豊かな土壌を守るためには、ごみを減らすことや、森林資源を無駄にしないように有効に使うこと、化学製品を河川に流さないことなどが必要であるということ子どもたちにも伝えていきたい。そして、子どもたちが、環境に配慮した大人たちの生活の様子を見ることで、自身の生活を見直すことができるようなきっかけをつくっていきたい。

◆当然ながら、土を使うことにより衣服が汚れる。しかし、土という可塑的な素材は、乳幼児にとってとても魅力的である。乳幼児が思いっきり遊ぶことができるように、保育者は、保護者に泥だらけになって遊ぶことの価値を十分に伝え、子どもの環境を作っていくことが求められる。



上田女子短期大学附属幼稚園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

K 児が見つけた土が、前日に雨が降ったことから程よい粘り気があり、泥団子を作るにはちょうどよかった。この偶然の土との出会いをきっかけに、どうしたら割れない泥団子ができるかという工夫につながった。また、泥の感触を子どもたちなりの言葉で表現し、その多様さや面白さを味わい、子ども同士で共感する楽しさを味わえた。

土は、含まれる水分や質、粗さによってさまざまな形状になり、その形状によって感触が異なる。この異なる感触は、多様な五感への刺激や気づきを子どもたちに与えてくれる。さらに、土の多様な五感への刺激や気づきは、子どもたちの豊かな表現能力を引き出してくれる。

【テーマ】土

【活動名】つるつるするね、もにゃもにゃ！（夏）

【年齢】4歳児

【ねらい】・砂、泥、土粘土など自然の素材のいろいろな感触を楽しむ
・友達と一緒に素材からイメージをふくらませて遊ぶ

【活動内容】

砂場ではうまく泥団子を作れないK児・R児・F児。その中でもR児は、自分の思いを友達に伝えることが少なく、また、相手の気持ちを感じて遊ぶ経験も少ない。K児とF児はいつも遊んでいる友達だった。

雨上がりの原っぱで、タイヤブランコで遊んでいたときのこと。K児は、原っぱの粘土がむき出しになっているところを見つけて、「おーい、R君たち！お団子作る？」と呼びかける。

以前、裏山へ粘土取りに行っただこと思い出して、砂場ではうまく泥団子を作れなかったが、この土でなら割れない泥団子ができると思ったようだ。

R児はK児の声を聞いて、「お団子作る！」と走り寄って行った。

K児の誘いにR児がのり、一緒に泥団子を作っていく。

指で、粘土の固さや湿り具合を確かめながらかき集める。

R児は、ぎゅっ、ぎゅっと握りながら、「つるつるするね」と、土の感触を表現した。

そこに、F児が走り寄ってきた。2人の楽しそうな様子見て、自分も遊びに加わりたくなったようだ。

R児は、また、指から伝わってきた土粘土の感触からイメージした言葉を表現した。

「わー、もにゃもにゃ」と言って笑う。

K児もまねして「もにゃもにゃ」と言う。土の感触と言葉の面白さを感じている。

K児は、今度、粘土を手のひらで上下におさえながら丸く固めていく。R児も、K児と同じように丸くしていく。どのようにやったら、割れない泥団子ができるのか、手のひらの広げ具合や力の加え方、転がし方など、微妙な加減をしながら作る。

だんだん丸い団子になってきたのを大人に認めてほしくなったのか、教師の方を見てにこりと笑う。

そこから、どのくらいの大きさの泥団子にするか言い合う。

すると、F児が、「おれが作ってあげる。超でかいの。割れないよ。前すみれさんの時（年少の時）作れたもん。」 F児は年少の時に裏山の粘土で大きい泥団子が作れたことを思い出して得意気に話す。

K児は、土でどろどろの手をF児の前で見せた。F児も自分の手を見せ、

「泥じゃりじゃりや」と言い、笑い合う。粘土の感触や真っ黒になった手からイメージする言葉を表現する。3人で、その言葉の響きを楽しむ。

最後は、出来上がった泥団子を教師に得意気に見せて、丸い泥団子ができたと満足しているようだ



った。

その後も、よく原っぱに泥団子づくりに行っている。他の子にいい土の場所を教えたり、乾いているときは、掘って湿った土を掘りだしている。

【子どもたちの育ち】

以前に土粘土を扱った時の感触や特性をしっかりと覚えており、そこから、泥団子にしても割れないかもしれないというアイデアから主体的な行動となった。

また、いろいろな土の感触を言葉で表現することや友達同士で同じ質の土を探すことから、3人の気持ちが共感し、意気投合することで、「友達」というものを意識した楽しい活動となった。

相手に自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づきながら集団で生活して遊ぶ経験が少ないR児だったが、土粘土の感触を言葉で表現することで、その感触や喜びを友達と共有する楽しさを味わえたのではないかと。

この活動から、3人は他の友達に土の場所を教えたり、土の表面が乾いている時は地面を掘って湿った土を探すなどの想像性をもって探究している。



【この事例に対する園長先生の思い】

一言で土・砂と言ってもいろいろなものがあります。どのくらいの細かさ（粗さ）であるのか、どのくらいの水分を含んでいるのか、それによって形状が違ってきます。それを子どもたちは、いろいろな言葉で表現しています。ざらざら・べたべた・ぬるぬる・じゃりじゃり・つるつる・・・子どもが感じたままに「もにゃもにゃ」と言いながら粘土だらけの手を見せ合っている姿を目にした時は、「感動が口から出た」といった感じでした。

形状だけでなく、場所や時間によって土はあたたかくなったり、冷たくなったりします。季節によっても随分違います。6月の雨を含んだ土、8月の焼けるような土、11月の木の実や松葉が混じった土、12月は霜柱が立ちます。1月は雪に覆われています。そんな土や砂をシャベルですくったり、掘ったり、集めたり、カップに詰めたり、型を抜いたり・・・砂遊びはいろいろな形で楽しめます。

子どもたちは、素手で触れたり、握りしめたりしながら泥団子を作ることもあります。どこの砂で団子の芯を作るのか、てのひらをどのくらい広げ、どのくらいの力で握っていったらいいのか、どのくらいの固さになったら、どんな砂をふりかけるのか、どんな色になればいいのか、その砂がどこにあるのか。試行錯誤を繰り返す中にいろいろな発見があります。湿り気と硬さを手のひらの感覚が確かめていって、気持ちは手のひらに集中していく、それはもう職人技です。始めは見よう見まねで作ります。砂や土は、壊れててもまた作り直すことができます。何度も感触を楽しんだり、イメージに近づくまで作り直していけることが土の魅力だと思っています。失敗がないのです。

また同じスペースで遊ぶ子どもたちは自然と役割分担ができていきます。共感や言葉のやり取りが生まれていきます。

一方で、年少児がそうやって泥団子を作ることは悪いことではないと思いますが、感覚が発達していく時は、手のひらの上だけの感触ではなく、体じゅうを使って砂や土を楽しんでほしいと思うのです。始めは体中で大きな動きで、だんだんに指先で細工をしていくのがいいと思います。いろいろな道具もありますが、素手、素足、もっと言えば裸で砂とたわむれ、体中で砂や水の感触を楽しむことが大切、そんな時は、心は解放されています。

私たちの園は、敷地が広く、園庭、原っぱ、裏山など、それだけいろいろな性質の土があります。この上田地域は良質の瓦ができるくらいの粘土質の土に恵まれています。また裏山は、大昔海だったこともあって、海底にあるようなつるつるした砂が在ったりするのです。そんな地域の特長のある土で遊ぶことが大切です。ふるさとの水や空気が体に合うように、ふるさとの土は命を喜ばせることなのでしょう。

小さい子どもは、土で思いっきり遊ぶべきです。体中が真っ白くなるほど土まみれになって、汗や泥にまみれたり、爪に泥が挟まったりしている子どもが、思いっきり遊んでいる・思いっきり魂をゆさぶっている子どもなのではないでしょうか。それが長野の子どもです。

花・草・木と関わる活動

私たちの世界には草や花、木などの植物があふれています。季節ごとに咲く草花は、種をつくり、根を残して、翌年もまたちゃんと同じところで咲き続けます。春になるとそっと顔を出すフキノトウやコゴミ、ワラビといった山菜に毎年同じ場所で出会う嬉しさは、信州ならではの豊かな自然体験です。植物から種や苗をいただいて育てる畑仕事の営みは、日々の水やりや夏の草取りといった地道で手間のかかる作業を経て、作物を収穫する喜びへとつながっていきます。空に向かって伸びる大きな木々は、春から夏にかけては気持ちのよい木陰を作り、私たちをその懐に抱きます。秋、色とりどりの落ち葉の積もったふかふかの道を踏みしめて散歩したら、子どもたちのポケットには、ほら、どんぐりがいっぱい！植物との多様なかわりは、緑豊かな環境を守っていく意識にもつながっていくはずですよ。

植物との多様な関わり方

- 花や葉っぱをさがす／摘む
- 葉の形を比べる／見立てて遊ぶ
- 小枝やどんぐり、松ぼっくりなどを拾う
- 花や葉っぱをすりつぶす
- 花や木のおいをかぐ
- 木や草になっている実を取る
- 山菜やきのこを探して採る
- 樹液やヤニに触る
- 木の枝やつるにぶら下がる
- 木に登る・揺らしてみる
- のこぎりで木の板や枝を切る
- 金槌を使って木片に釘を打つ

植物がもたらす五感への刺激

- 木や花の匂いを楽しむ
- 花の色や形、葉の葉脈の美しさを味わう
- 木陰の涼しさを感じる
- 木肌のごつごつした手触りを感じる
- 風に葉がそよぐ音を楽しむ
- 食べられる植物を食べ、味わう
- 木の実(栗、クルミ、アケビなど)の味を味わう
- ナズナなどの植物で、音を出して楽しむ
- 様々な(安全な)葉を触り、葉の鋸歯や厚みを感じる

植物と関わることによる気づき

- ささまざまな草花や木があることに気づく
- 冬の間の木の芽などに気づく
- 葉や花をすり潰すと色水が作れることを知る
- 植物には花が咲いて実がなり種がなることを知り、撒いた種から芽が出て、また同じ花が咲くことに気づく
- 木の樹液に集まる虫がいることを知る
- 木片や小枝が水に浮かぶことに気づく
- 木に巣を作る鳥や虫がいることを知る
- 秋になると葉の色が変わり、落葉する木があることに気づく
- 草花や山菜が毎年同じところに芽を出すことに気づく
- 花・草・木などさまざまな植物と人間の生活との結びつきに気づく
- 植物の種子の形や、種子散布のさまざまな形態に気づく



植物と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- ・身のまわりにある花や草の存在を知り触ったり摘んだりすることを通して親しみを持つ
- ・木肌の硬くごつごつした感触を味わう
- ・乾いた小枝や落ち葉を踏みしめる感触を楽しむ
- ・野菜や果物などの味を知る

○3歳

- ・森の中にさまざまな虫や動物が暮らしていることに興味を持つ
- ・松ぼっくりやどんぐり拾いを楽しむ
- ・小枝をひろったり花を摘んだりすることを通して、森の環境に親しみをもつ
- ・野菜や果物などへの興味を持ち、すすんで食べようとする



○4歳

- ・花や葉っぱをすり潰してきれいな色水を作ることを楽しむ
- ・拾ってきた小枝やどんぐりを使って作品を作ったり遊びの道具として工夫することを楽しむ
- ・植物の種を撒き育てることを通して、草花が活着ていることに気づく
- ・野菜や果物の種類、名前に興味を持つ

○5歳

- ・作物を育て、収穫し、食べる経験を通して、いのちの大切さに気づく
- ・大きめの枝や木を組み合わせて、友だちと工夫して秘密基地などを作ることを楽しむ
- ・道具の使い方を知り、道具を使って木を切ったり、板を打ち付けたりすることなどに意欲的に取り組む
- ・野菜や果物の栄養と自分の体との関係について関心を持つ
- ・植物や野菜を保存する方法を知る
- ・野菜や果物を使って調理を楽しむ

大人が子どもに伝えたい植物との関わり方

- ◆植物を必要以上に折ったり、採ったりしてはいけない。
- ◆山菜やキノコなどはすべてを採集せず、必ず少し残す。
- ◆植物の中には、人間に害を及ぼす物もあるので注意する。
 - ・触れるとかぶれる植物：ヤマウルシ、ツタウルシ、ハゼノキ、ウルシ等
 - ・とげのある植物：イノバラ、イラクサ、タラノキ等
 - ・毒のある植物：キツネノボタン、タケニグサ、マムシグサ等
 - ・口にしたら毒がある植物
 - シキミ、ドクウツギ、キョウチクトウなどの樹木類
 - ドクゼリ、トリカブト、ハシリドコロ、スズランなどの草類
 - ツキヨダケ、イッポンシメジなどのキノコ類
- ◆特にキノコなど、毒の有無が確実にわからない物は口にしない。
- ◆高山植物など採ってはならない植物を知り、山や森の環境を守ることを心がける。



学校法人福島学園 みすず幼稚園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

竹林、リンゴ、梅、柿の木等の豊かな自然と接することができる場所で、子どもたちが一週間自由に遊ぶアドベンチャー週間を行った。

友達と親しくかかわる協同的活動の中で「興味の広がり・深まり」「認められる体験」「自己調整力」「気づきとコミュニケーション」を4つの柱として、保育者との関わりの中で学びが展開された。

【テーマ】花・草・木

【活動名】リース作りの輪が広がる（秋）

【年齢】5歳児

【ねらい】年後半、この時期自然豊かな環境の中で、自ら発想を膨らまし、主体的に活動に取り組む

【活動内容】

活動場所は幼稚園の自然体験の森（竹林、リンゴ、梅、柿の木などがあり、子どもたちが思う存分走り回れる野っ原）で行う。

子どもたちは日頃遊んでいる遊びを長期的にできることから、どんな遊びをして楽しもうか仲間と相談してから遊ぶ。

「基地を作ろう」

- 男の子の集団が竹林から竹を切り出してきた。
- 待っていた仲間と梅の木を柱に数本の竹を立て掛け、基地らしくなってきた。

「おんなの子の部屋」

- 男の子が作っている基地の隣では女の子が相談をして、野花を飾ったり段ボールを台にしてごっこ遊びがはじまった。



「この長さにしたいんだよ」「おさえてあげるね」
どうやったら竹と竹をつなげられるか皆で思案中。



「ちょっと長すぎるよ」「オレが切ってやる！まかせて」のこざりを使う時は、アニキ気分なのか言葉使いもちがうね。

子どもたちの様子	保育者の視点（かかわり）
<ul style="list-style-type: none"> • 降園時間が近づくと男の子は（こうじちゅう）、女の子は（おんなのへや）と書いた看板を吊るしていた。 • 思い思いの活動をしている女の子の中で、一人“つる”を使ってリースを作っていたS子。 • 1日目は個の活動を楽しんでいるようにも見たので、「かわいいリースができたね。何処かに飾れるといいね」と声をかけると「うん」とうれしそうに返事をしてくれた。 	<ul style="list-style-type: none"> • 段ボールが欲しいと言われ明日用意しておく約束をする。 • クギ、ノコギリ、ハサミなど置く場所を確認する必要がある。 • 明日からどんなふうに友達とかかわって行けるかな。
<p>2日目</p> <ul style="list-style-type: none"> • 屋根は用意しておいた段ボールを見つけて利用。基地らしくなってきた。 • 女の子は余った段ボールを敷いて床に。靴を脱いでリラックスマード。 • 「基地の入り口はここがいいな」男の子たちは青竹の葉っぱの部分を入力に立て掛けた。 	<ul style="list-style-type: none"> • Sちゃんリース持ってみんなの所へ行ってみないと誘う。 • 思いもよらずU君に声を掛け

<ul style="list-style-type: none"> ・「Sちゃん、そのリース、ここの入口に飾っていい？」リーダーシップをとっていたUがS子に声をかけた。 ・S子もびっくりしたようだったが、嬉しそうに「いいよ」と、返事をしてUに渡した。 ・そばで聞いていた女の子の集団が口を出す。 ・「ええ！そこじゃなくて、こっちがよくない？」 ・ああでもない、こうでもないと言っているうちに「私も作りたい！Sちゃん この木どこにあるの？」「連れてって」とせがんだ。 ・「いいよ 少し上の方だけどいい？」と笑顔で答えるS子。 ・女の子のパワーはすごい。目標が見つかりとら、6人の子がS子を急がせて走っていった。 	<p>られて保育者もびっくり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段恥ずかしがり屋のSちゃんが大きな声で返事したので驚いた。 ・みんなから褒められてはにかんだ様子をみせる。 ・みんなに認められたSちゃんいい顔している。 <p>※つるの状態、大きいのを切っているのは保育者の役割。保育者も急がなくては！</p>
--	---

「リース作りに挑戦」

子どもたちの様子	保育者の視点（かかわり）
<ul style="list-style-type: none"> ・まず、つるの存在に子どもたちは戸惑う。 ・「なに～これ 切れないよ。先生切って！」 ・S子が剪定ばさみを持って来て友達に両端を持たせて力を入れて切った。 ・「すごい！Sちゃん」「私のおねがい」危なくないの？「先生、私も切ってみたい」「私はこわいからやめとく」 ・子どもたちは自分のやれることを判断して決めている。 ・つるは結構クルクル巻き付いて、格好は悪いが何とか形になってきた。 ・「Sちゃん ありがとう ここに私たちの採ってきた花を飾ろう」 ・昨日採ってきた花をさそうと戻ったら、他の女の子がおままごとに使ってしまってなくなっていた。 ・「私たちが採ってきた花使わないでよ！」と言ってはみたが、花や実を採りに行く楽しみの方が大きかったようで、すんなりあきらめた。 ・この時期、野山には赤や青、紫の実がいっぱい。本当にわくわくしながら、疲れを感じず山の奥まで入って行く子どもたちの姿の中に勿論S子もいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・扱いづらい物に子どもたちはどう対応していくだろうか。 ・初めて使う道具は危険もあるので、使い方をしっかり教える。 ・初めてなので細目のつるを切つてやる。 ・しばらく子どもたちに任せて、他のグループの活動に行き、その後、様子を見に戻った。 <p>※山の実を食べないように注意する。 ※入ってはいけない所には赤いテープを張っておく。</p>

【子どもたちの育ち】

- ・ S子は手先が器用で創造力がとても優れているが、友達づきあいが少し苦手。そんな中、得意な能力を友達に認められることによって、満足感を得たり、自信につながったりする姿がみられた。
- ・ 幼稚園で一番先にやる必要があることは何か。「自己主張をさせなければいけない」この自己発揮が十分に受け入れられた時、子どもの表情も、動きも、言葉も輝いている。S子が主人公になって遊びをリード出来た環境、自然の中だからこそ、早く発揮された。

【この事例に対する保育者の思い】

- ・ 遊べない子どもを遊ばせるには、ただ待っているのではなく、遊びたい心になるように私たち保育者が子どものあるがままを受け入れ、それを喜びとして受け止めることが大切だと思う。(子どもと先生との信頼関係)
- ・ 幼児は自然の環境や人為的な環境からの影響を受けやすい。幼児の発達にとってプラスになる環境をよく見極め、必要な経験、出会わせたい経験を考えすすめていくことが、保育の大切な役目と考える。
- ・ 最近の子どもたちの様子を見てみると、自然の中での活動、さまざまな世代の人からの直接影響を受ける活動、人と人とのふれ合いの大切さや、物に直接取り組む経験などが非常に乏しいように思う。その点自然の中での体験は、すべての子どもたちが刺激を受け、受け止められ、自分から行動を起こして、充実感や達成感・満足感などを味わうことが出来ると思う。

学校法人篠ノ井学園 南長野幼稚園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

何の苗かわからない 1 本の苗との出会いから、子どもたちは葉っぱの形やにおい、手触りなど五感をフルに使って植物とかかわり、大切に育てようとする姿が見られた。植物の育つ様子への関心が広がっただけでなく、大きく育ったかぼちゃの実を調理したり、ハロウィーンに合わせて“お化けかぼちゃ”を作るなどの発展的な活動の中で、友だちと話し合ったり協力しあったりすることの大切さを学んだ事例である。

【テーマ】花・草・木

【活動名】野菜の苗を育てよう！

【年齢】4 歳児

【ねらい】・五感を使って、葉や花の色、形、においなどを感じたり観察したりすることを通して、植物の特徴を知り、身の回りの植物に興味を持つ

- ・水やりや草取りなどの役割を通して、花が咲き、実が大きくなっていく野菜の成長過程に積極的にかかわり、いのちの大切さに気づく
- ・育てたかぼちゃの実を調理して食べることを通して、野菜の味わいを楽しむとともに、食べ物の大切さや、作物を育ててくれている人のありがたさに気づく
- ・苗の成長を通して、畑の様子が変化していくことに興味を持ち、教室にもかぼちゃ畑を作りたいという目的に向けての道筋を楽しみ、作り上げた満足感や達成感を感じる

【活動内容】

1. 4月 野菜の苗を植えよう！

担任がかぼちゃの苗を買ってきました。そして、子どもたちには何の苗か伝えずに「みんなで育ててみない？」と言いました。子どもたちは、何の苗なのか興味しんしんです。

「葉っぱは？キャベツのにおいがする。」「キャベツだね！」

「でも、ざらざらしているよ。」「きゅうりだよ！」

子どもたちは、どんどん想像力を膨らませていきました。どんな野菜が育つかの？目的意識を一つに、野菜を育てることに挑戦しました。



2. 5～8月 苗を育てよう！

初夏から夏にかけて、水やりや草取りをしながら、畑で大切に苗を育てていきました。

すると、たくさん葉っぱが出てきて、つぼみをつけ始めました。

つぼみはどんどん大きくなり、やがて黄色い花を咲かせました。黄色い花が枯れると、その下から小さな丸い実が出てきました

葉っぱがいっぱい出てきた！



つぼみがあるよ！



つぼみが黄色い花になったよ！



花が枯れちゃった！でもなんか変？



これ、いったい何の実だろう??



緑色の丸い実を見つけて、子どもたちはずっと不思議な思いを抱えていました。だんだんに形がはっきりしてきて、ついに、かぼちゃとわかるとびっくり!!「メロンが良かったなあ〜。」子どもたちが一言。

3. 9月 収穫をしてみんなでクッキングをしよう!

収穫したかぼちゃをどんなふう料理して食べたいか、子どもたちに投げかけると、「クッキー」「いいねえ!」ということで、かぼちゃクッキーを作ることになりました。

かぼちゃを茹でて潰し、そこに砂糖とバターを入れて練りました。次に粉を入れていきました。「うわあ〜手がべとべとになった。」「かぼちゃが柔らかすぎるんだよ!」「どうする?」「うーん、粉を入れたらいいんじゃないかな。」べたべたになった状況の中、「どうしようか?」と友だちと話し合いながら解決していきました。



4. 10月 みんなで“お化けかぼちゃ”を作ろう!

「作品展に向けて皆で何を作ろうか?」という話し合いがありました。「部屋の中にかぼちゃ畑を作ろう!」ハロウィーンの時節だったためか「お化けかぼちゃも作ろう!」ということになりました。

“かぼちゃ畑はどんな感じに?” “大きなかぼちゃをどの様にする?” “かぼちゃの色は?” グループ毎に設計図を描きながら作り上げていきました。作り上げていく中で計画とは違う思いが生まれ「やっぱり違う色にしたい」「ダメだよ! みんなで決めたんじゃないの!」それぞれの思いがぶつかり合い…。「そうだ! こうしたら、自分の好きな色を塗るところも作ればいいよ」友だちの思いも受け入れ折り合いを付けながら、教室に“かぼちゃ畑”と“大きなお化けかぼちゃ”が出来上がりました。かぼちゃの苗を育てたことをきっかけに、かぼちゃをテーマとする発展的な活動へと、子どもたちと共に深めていきました。



口の中はみんなの好きな色にしたよ

【子どもたちの育ち】

担任の言葉より

“かぼちゃの苗”との出会いから“クッキング”そして“お化けかぼちゃ作り”へと活動が展開していきました。子どもの心の動きを捉え、それに基づいて環境を構成して次の活動を生み出すことにより、一つひとつの体験が深い意味を帯びてくると感じました。

【この事例に対する園長先生の思い】

本園では、教育目標に「仲良く 元気に 遊ぶ子」、具体目標の一つに「意欲をもって力いっぱい頑張る子ども」を据えています。この目標の具現を図るため、子どもたちがわくわく感をもって、意欲的に取り組む保育活動を目指しています。

そして、連続性、発展性をもったダイナミックな活動になることを願っています。敷地が狭く自然が少ない環境の中で、自然にかかわる活動をするには限りがありますが、この事例は、野菜の苗(素材)との出会いの工夫、子どもたちの意識を大切に、保育者の願いに沿って展開を図った事例です。環境構成を工夫し、自然とのかかわりから発展させる保育活動を、今後も展開させていきたいと思ひます。

水と関わる活動

水はかたちを持ちません。さらさら流れ、澁み、たゆたいながら、一瞬たりとも同じところにとどまらない川の流れに入ると、そのダイナミックな動きを身体で感じることができます。高いところから低いところへ流れる水の性質を知れば、地面に水路を掘って、水を流してみるあそびが生まれます。雨の日は、ぽちゅん、ぴちゅん…とつぶやきながら落ちる雨のしずくの音に耳を傾けたり、水たまりに長靴で入ったりする楽しみもあります。透明な水に花びらや葉っぱを入れて揉んでいると、ほら、きれいなジュースのできあがり。水に何かを浮かべてみましょう。葉っぱや小枝は浮かぶけど、小石は沈んでしまったね。水の不思議な性質にも気づかせてくれるような、豊かなあそびの可能性を探してみましょう。

水との多様な関わり方

- 水たまりを歩く
- バケツや容器に水をためる
- ホースで水を流したり、ホースをつぶして水の形を変化させる
- 地面に水を垂らす／水を流す
- 水たまりに花や葉を浮かべる
- 水に石を投げ入れる
- プールに入って浮力を感じる
- 川に入って流れを感じる
- 水をかけあう・水面を手や枝でたたく
- 雨のしずくが落ちる音を聴く
- 川の流れる音を聴く

水がもたらす五感への刺激

- 手や体が濡れる感覚を楽しむ
- 水の冷たさを感じる
- 水の流れる音を楽しむ
- 雨のしずくが落ちる音を楽しむ
- 川べりの涼しさを感じる
- 水の冷たさや味やにおいを感じる
- 水の中での浮力や圧力を感じる

水と関わることによる気づき

- 水に濡れたものの変化を知る
- 土や砂に水を混ぜると泥になることを知る
- 水の流れる力と方向を知る／水の力が石や砂を動かすことを知る
- 水に浮かぶものと沈むものがあることに気づく
- 川の流れが速いところと澁んだところがあることに気づく
- 手や石で水の流れがせき止められることを知る
- 川底の石がすべりやすいことに気づく
- 川底や川べりに水草や苔が生えていることに気づく
- 川に住む生き物がいることに気づく
- 生き物にとって水が必要であることを知る
- 水を凍らせると氷になることを知る
- 水と人間の生活の結びつきに気づき、水を大切にしようとする



水と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- たらいやバケツに入った水に触って感触を味わう
- 水に入ったり体にかけることの気持ちよさを通して水に親しみをもつ
- のどが渇いたときに水を飲む

○3歳

- 川や雨どいなどを見て、水の流れる様子に興味を持つ
- 水あそびや泥あそびを通して、水の感触を楽しむ
- 水たまりを歩くことを楽しむ



○4歳

- 穴を掘ったところに水を入れたり容器で水をすくったりして、水たまりを作ることを楽しむ
- 川に草花や葉っぱを流して、流れに浮いたものの動きを楽しむ
- 河原にある石の形に興味を持ち、いろいろな大きさや形の石を集めて制作を楽しむ
- 砂場や地面を掘って水を流し、川を作ることを楽しむ

○5歳

- 身近な素材で作った舟などを水に浮かべ、どうすればうまく浮かせるか考える
- 川や田んぼなどの水辺に住む生き物（魚・ホタル・ヤゴなど）の生態に興味を持つ
- 自然の川の中に入り、流れの速いところと遅いところがあることに気づく

大人が子どもに伝えたい水との関わり方

- ◆川や池で遊ぶときは、必ず大人と一緒に行動し、勝手な行動はしないよう伝える。
- ◆川遊びをするときは、前日の雨や当日の天気を調べる。(川の水量が急激に変わる可能性があるため。上流で雷雨の場合、鉄砲水も起こる。)
- ◆下流(100~200m先)に滝などがないかどうか確認する。また、そのような場所では遊ばないようにする。
- ◆上流に発電所(ダム)がある川では、放水の時間を調べ、その時間の前後では遊ばない。
- ◆足の届かない川や池、プールには基本的には入らない。
- ◆テトラポットやストレーナー*などの障害物がある場所での遊びは避ける。
*ストレーナー：強い吸引力で細かい枝や倒木、葉などが集まっている場所。このような吸引口には近づかないこと。
- ◆極端に速い流れや堰堤**がある場所では遊ばない。
**堰堤：川の底が階段状に下がっている所。水が渦を巻いているため大人でも脱出できなくなることがある。
- ◆川遊びでは、ライフジャケット(体重の10分の1の浮力のもの)を着用し、履物も川底の石やガラスなどでけがをしないように簡単に脱げない運動靴など(かかとがしっかり固定されている物なら良い。)を履いて遊ぶ。
- ◆浅い川などでは、石に苔が生えていたりして滑るので、転倒などに気を付ける。
- ◆水に長い間入ることにより低体温(ハイポサーミア症状)***となり、命を落とす可能性もあることから、定期的に水から出て体を温めること。
***ハイポサーミア：体温が下がることにより、内臓や脳などの主要な臓器の機能が低下すること。
- ◆気温が高いときには、熱中症に気を付けること。
- ◆水に入るとき、いきなり飛びこまないこと。



森のようちえん ぴっぴ の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

水。姿や形を変幻自在に変えながら、「水」はいつも私たちのそばにある。子どもたちは身近な「水」と関わり、その動き、変化を全身で味わう。大人が準備し、想定通りの流れに子どもを従わせるような「プログラム」では限界がある。まずは、たっぴりと子どもたちが「水」と関わるができる時間を守ってあげたい。大人が導いたり、声をかけたりしなくても、子どもたちは「水」と出会い、じっくり関わりを深めていくことだろう。

【テーマ】水

【活動名】いろんな水

【年齢】2歳児～5歳児

【ねらい】水と関わる

【活動内容】

森のようちえんぴっぴの保育は、2つに大きく分けることができる。火・水・金曜日は2～5歳児までの保育の「ぴっぴの日」。月・木曜日は3～5歳児の保育の「おおきいくみの日」。「ぴっぴの日」には、特別なカリキュラムやプログラムはない。9時半頃から15分前後の朝の集まり、11時半からのランチ、13時40分からの帰りの集まり。この3つの時間が決まっているくらいで、その他の時間は、子どもたちは森の中でたっぴりとゆったりと過ごしている。一方で、「おおきいくみの日」には、森の中でたっぴり遊ぶと同時に、年間を通じて森と出会い、関わるプログラムに取り組んでいる。「木の赤ちゃんを探そう」「森の色さがし」「葉っぱのカルタ」「葉っぱの神経衰弱」「フィールドビンゴ」「森の福笑い」「森の中で料理」「木の実の標本箱づくり」「巣箱づくり」「巣箱の掃除」「冬芽探し」「雪の上の足跡探し」「落葉でお絵描き」「草木染」「アートの時間」「凧づくり」「手作り大型かるた」「木の实のおみせやさんごっこ」「リースづくり」…。これ以外に年間を通じて田んぼに出かけ、籾蒔き・苗床づくり、代掻き、田植え、草取り、稲刈り、脱穀、お餅つきと一連の仕事をしている。



午前もしくは午後2時間前後のたっぴりとした自由遊びの時間を軸としながらも、3歳児以上はその遊びをより彩り鮮やかにするためのスパイスとしての各種のプログラム。遊びを通じて森と出会い、関わり、親しくなる。そしてそれらの体験がプログラムを通して言語化、表現化されていく。大事なのはプログラムそのものではなく、その前後の豊かな遊びだ。

今回紹介する事例は、あえてプログラムではなく「遊び」の中での様子とした。子どもたちは日々たっぴりさんの「水」と出会い、関わりを持っている。水と触れ合っているそのこと、その時間こそが大切なのである。

●4月。入園したばかりの2歳児の咲子は、不安が拭えず泣いて過ごす日々をすごしていた。泣きながらも仲間の遊んでいる様子を目で追いながら、少しずつゆっくりぴっぴの生活にも慣れていった。ある日、咲子は外水道の所に1人でいた。背丈くらいの所から流れ出る水を手の平で受け、落ちてくる水の感触をずーっと味わっている。落ちた水が地面に跳ね返り、靴にも水がかかる。すると、足で水を受け靴にあたる水の感触も味わい始めた。しばらくそうしているうちに全身びしょ濡れ。保育者がその濡れっぷりに驚くと、いたずら顔でにんまり。着替えた後も、すぐ水道の所へ…。こんな水遊びを来る日も来る日も続け、安心した表情になっていった。夏には頭から水をかぶり始めた。そして、冬。バケツに水を汲みに行ったはずが、水道から出る冷たい水で、手袋を洗い始めた咲子。冷たいだろうに、清々しい笑顔。春に感じていた不安も、すっかり水で洗い流されたように感じた。

●新緑の5月。雨上がりのお散歩の時間。愛子(5歳児)「あ！モミジの赤ちゃんがいっぱい！」渚(5歳児)「サンショの赤ちゃんだ！」と見つけながら歩いている。4歳児の理香子、陽子、朔太郎が「見て、見て～！」「来て～！」と呼んでいる。アブラチャンの葉に陽あたり、たっぴりさんの水滴がキラキラと光っている。理香子「これ、朝の絵本(「みずたまレンズ」、今森光彦、福音館書店、2008)とおんなじだよね」陽子「おんなじ！」近くで2歳児の慶太が「葉っぱはね、地面のほうにあるのとお空のほうにあるのとおあって、お水が助けているんだよ。」と歩きながら話している。保育者「ほんとだね、地面にもお空にもいっぱいだよ～！」慶太は「そうでしょ!？」と笑顔を返してきた。

●田んぼへ代かきに出かけた5月のある朝、田んぼを見るなり行夫（5歳児）「こんなに水があって田植えできるの？水が多いね。」 宇一郎（5歳児）「田んぼの水が多いと植えるとき苗がもぐっちゃうね。」 昨年の田植えのことをよく覚えている。しばらく田んぼに水を入れずにいたが、場所によってなかなか水が引かない。困って大人が水路の出口を調節していると、泰介（5歳児）が「川みたいに流したら？」と、田んぼの泥に足で跡をつけて川を作り、水を流し始めた。そのうち、冬のソリを引っ張ってなにやら試していると思ったら、「博人（3歳児）を乗せて引っぱるともっと大きな川ができるよ！ほら道みたいに跡が付くでしょ。」と、水路の出口に向かって、何本もソリの跡をつけている。「俊輔（3歳児）を乗せてもあんまり跡がつかないんだけど、博人を乗せると跡がつくんだよ。」と体格のいい博人を乗せた方がしっかりと跡がつくことに気がつき、何度も行き来して、たくさんの水の通り道を作る。みるみるうちにその道を伝って水が出口へ流れ、田んぼ全体の水が引いていった。宇一郎「すげー！びっぴで作る川のでかいのみたい！」先日、びっぴの森で土を掘って川を作り雨水を流して遊んだ時の水の流れを思い出した様子。泰介「ほら、田んぼの水がなくなったでしょ。」行夫「ほんとだ！」宇一郎「すげー！」



●12月の雨上がりのお散歩。5歳児の麗子、4歳児の彩里、夏希とドングリを探しながら歩いていたら、陽の光がさぁーと射ってきて小さなモミジに付いた水滴がキラキラと光り出した。麗子「わぁー、なんてきれい！太陽が素敵に光らせてくれたわ！」と大感激。彩里と夏希は手に持っていたドングリの帽子に、枝に付いた雫をそーっと集め始めた。麗子も集め出し「私たちは水の妖精ね」3人の水の妖精たちは一時間もずっとそーっと雫を集めていた。

●1月下旬、寒い朝。びっぴの森の一角にある水道。地面から60cmほど立ち上がったところに蛇口がある。昨日、蛇口をしっかりと閉め忘れたのだろう、一晩中かけてゆっくりゆっくり水滴がしたり落ち、それがきれいな氷柱となっている。早めに登園した里佳子（3歳児）は、お母さんと離れがたかった様子で水道のそばで泣いている。氷柱にはまだ気がついていない。里佳子の泣き声が聞こえてやってきたのだろうか、泰弘（5歳児）がこっちに向かって歩いてくる。氷柱に気がついたようで、小走りしながら水道に近づいて来た。「あ！こんなところででっかい鼻水がある！水道が鼻水垂らしてるー！」とニヤリとしながら泰弘。泣いていた里佳子が顔をあげ、「でっかい鼻水」を目を丸くして見つめる。くすっと笑い、里佳子は泰弘と笑顔で歩き始めた。

●雪が落ち葉の上にはばらばらと音をたてて降っていた2月。2歳児の夏葉、遥樹、陽一がホオの葉の上に積もった雪を、手にサラサラと乗せている。遥樹「お砂糖だ～！あっ、でもお砂糖は茶色だ！」夏葉は手袋を取って手のひらに乗せ、じわじわと溶けていくのをじーっと見ている。夏葉「あ、雨になった！なっちゃん、雨好き…」 遥樹「何で雨好きなの？水だから？」 夏葉「うん！」

●2月中旬。寒い日が続いているが、時々気温が上がる日もある。そうすると日中は雪が融けて水たまりになり、それが夜に凍って朝はきれいな氷ができています。その氷をシャベルで割りながら康人（3歳児）がつぶやく。「お水が冷たくなってツルツルになったんだよね。温かくなったらツルツルが水になるね。」 ゆっくりゆっくりではあるが、春は確かに近づいてきている。

【子どもたちの育ち】

聞いたこと、見たこと、触れてみたこと、読んだこと、体験したこと、失敗したこと…。子どもたちがそういうことから学び、感じていることは、大人の想像をはるかに超えている。そして、その瞬間に発せられる子どもの感性の言葉、感覚の言葉はとても新鮮な響きと深みを持っている。一緒に楽しんだり、笑ったり、すごいねと言ってくれたりする仲間への存在は大きく、「夢中になれるもの」「仲間」「時間」があれば子どもたちの育ちははぐくまれやすい。

【事例に対する保育者の思い】

子どもたちが感じたり、考えたりしている時間を大切にしたい。その子どもたちを手助けする大人の言葉は、最小限に、丁寧に選びたい。森のようちえんびっぴでは、このような思いを大切に保育をしています。

空・天候と関わる活動

空からは、季節ごとにさまざまな贈り物が届きます。空を見上げてみましょう。夏の雨上がりには美しい虹が、秋のはじめには稲光と雷が、天空を彩ります。また、夜空には星が瞬き、月が満ち欠けしながらめぐっていきます。四季の移り変わりがはっきりしているのは、信州の魅力のひとつ。冬の寒さは格別厳しいですが、その分子どもたちは、雪や氷、霜といった、信州の気候が作り出す現象を楽しめるのです。寒い朝、霜柱が立った地面をざくざくと踏んで歩いたり、薄氷が張った水たまりを探したりする楽しみ。寒さが厳しくなるにつれて軒先から長く伸びるつららも冬の風景のひとつ。雪がつもったら、雪だるまを作ったり、雪合戦をしたり、それで坂道を滑り降りたりと、あそびの幅が広がります。

空・天候との多様な関わり方

- 空を見上げる／虹を見る
- 雲を眺める／入道雲を見る
- 朝焼け／夕焼けを眺める
- 月や星を眺める
- 月の満ち欠けを観察する
- 天気を気にする／天気予報を見る
- 雪に触れる／雪の結晶を見る
- 雨の日にかっぱを着る／傘をさす
- 雪を丸めたり固めたりして、雪玉や雪だるま、かまくらなどをつくる
- 霜柱を踏む／葉についた霜に触れる
- つららに触る
- 氷を踏む／氷に触る／氷の上を滑る
- 戸外で氷を作る

空・天候がもたらす五感への刺激

- 陽射しの温かさを味わう
- 気温を体感する
- 風の涼しさや冷たさを感じる
- 雲の形の変化や面白さを楽しむ
- 雷の音や稲光に驚く
- 雪の積もった景色の美しさを味わう
- 虹や夕焼けの美しさを味わう
- 夜の闇／月明かりの明るさを楽しむ
- 星空の美しさを味わう／流れ星を見つけて楽しむ
- 雨の音やにおいを感じる

空・天候と関わることによる気づき

- 空の色や雲の形と天候との関係に気づく
- 雲が刻々と形を変えていくことに気づく
- 月が満ち欠けすることに気づく
- 入道雲が大きくなるとやがて雨雲に変わることを知る
- 雲の形から季節の移り変わりに気づく
- 気温によって雪の性状が異なることに気づく
- 強い霜が降りると花や植物が枯れることに気づく
- 気温が下がると葉の色が変わり落ち葉が増えることに気づく
- 寒い日には吐く息が白くなることに気づく
- 厳しい寒さを利用して作る食べ物があることを知る
- 太陽の動きから時間の経過に気づく



空・天候と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3 歳未満

- ・お日様の温かさを感じる
- ・風の涼しさや気持ちよさを感じる
- ・冬の寒さを感じる
- ・雪に触り、白さや冷たさを味わう



4 歳

- ・雨の日の生き物を探す
- ・洗濯ごっこなどを通し、風やお日様について興味を持つ
- ・空を観察し、雲の形が変わることや季節ごとに空の色が異なることに気づく
- ・雪合戦、雪だるまづくりなど、雪をつかったさまざまなあそびを楽しむ
- ・そりなどで、雪の積もった坂道を滑り降りて遊ぶことを楽しむ

○3 歳

- ・雲の形を見て見立て遊びをする
- ・日差しの強さ・弱さから季節の変化に気づく
- ・雪を型に入れたり、手で固めたりしていろいろなものを作ることを楽しむ
- ・雪を踏む感触や、足跡、手形をつけることを楽しむ



○5 歳

- ・雨の日の生き物を見つける
- ・風ぐるまなど、風を使って遊ぶおもちゃを作り、使って遊ぶ
- ・そり遊びや田んぼスケートなど、体をつかった冬の日のあそびを考え、工夫して楽しむ
- ・お泊り会などのときに、夜の闇を味わいながら夜空を眺め、星や月の美しさに気づく

大人が子どもに伝えたい空・天候との関わり方

- ◆日本には、雨や雪、日差しなどの微妙な違いをとらえた美しい日本語の表現がある。日本人の中にある自然を大切にしている感性を、美しい言葉を通して伝えていきたい。
- ◆気候の変化などの自然現象に、到底人間が立ち向かうことはできない。人間は、地球の中の生き物のひとつであるという謙虚な気持ちと、自然に対する畏敬の念を忘れずに、地球環境を考えた行動を子どもに示したい。
- ◆自然の脅威に対して自分の身は自分で守ることができる人に育てたい。そのために日ごろから、空の雲や空気、日差しなどに心をとめられるようにし、異常を察したらすぐに行動できるように、具体的な身の守り方などを教えていきたい。

コラム：気象災害から身を守るための知恵

◆雷から身を守るためには

- ①積乱雲の発達に加えて、地表面温度が高く、上空に寒冷前線がある場合に落雷は発生しやすくなる。積乱雲の発達、空が暗くなる、風が少し冷たくなるなど落雷の徴候がある時には早めの避難を心がける。天気予報や注意報などを小まめにチェックするとよい。
- ②ラジオに雑音が入ったり、雷鳴が聞こえたりしているときは安全な場所に避難する。比較的 안전한避難場所として、建物内、車の中、列車の内部などが挙げられる。さらに屋内でも、すべての電気器具、天井・壁から1m以上離れていればより安全である。雷が鳴っているときには原則屋外に出ないこと。特に山では雷発生の場所はすぐに移動するので、少しでも雷鳴を聞いたなら安全な場所に避難する。特に危険な場所は山頂、尾根、開けた場所・独立した木や高木の直下、川や海面、屋外プールなどである。
- ③近くに安全な場所がない場合には、電柱、煙突、鉄塔、建築物などの高い物体のてっぺんを45度以上の角度で見上げる範囲内で、その物体から4m以上離れたところ（保護範囲）で姿勢を低く退避する。高い木の近くは危険なので、最低でも木の全ての幹、枝、葉から2m以上離れて、姿勢を低くする。いずれも持ち物は、自分の体よりも低く持つか体よりできる限り遠くに置く。雷の活動が止み、20分以上経過してから安全な場所に移動する。

◆突風（ダウンバースト）について

県内において竜巻の発生は少ないが、よく晴れた日に積乱雲からの強い下降流による突風（ダウンバースト）が発生することがある。テントが飛ばされるなどの被害が報告されているため、特に注意する必要がある。

◆雪・氷の遊びの危険から身を守るためには

湖や池に張った氷は薄いところもあり、気温の変化で氷が割れることもあることを知っていること。氷が割れて水没すると、大人でも自力での脱出は難しい。寒い環境で遊ぶときには、低体温にならないように十分注意する。乳幼児は遊びに夢中になると、体温が低くても動き回り、突然様態が変わることもある。野外で命を落とす事例は、低体温によることが多い。これは、夏山で雨に濡れた場合も起こるので、天候にふさわしい防寒具の正しい着用を教えたい。（気象庁HP参照：<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>）

NPO 法人 響育の山里 くじら雲の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

ある日、山道を歩きながら子どもの1人が言った。「夜までくじら雲にいてみたい」

そこで、夕方、年長児だけくじら雲の拠点に集まり、1泊2日のパジャマパーティーを計画することにした。

現代では、夜になっても24時間街灯が灯っており、本来、夜は真っ暗であることを忘れがちである。くじら雲の拠点は山の中腹にあり、周辺には人家が1軒あるだけで、街灯はない。夜になると一面が暗闇に包まれる。暗闇の中では、人間は様々な音や気配、光に敏感になり、怖さを感じる。その恐怖感は、人間は本来、自然の中の一部に過ぎないということを体感させてくれるとともに、自然の偉大さに気づかせてくれる。また、その恐怖感は、普段気付かない人の温かさやぬくもりを教えてくれる。

いつも昼間見ている風景が闇の中ではどう変わって見えるのか、闇の体験を通して果てしない宇宙や身近な人の存在、見えない野生動物の存在などを五感を働かせて感じ、また、夜明けの空を観察し、空の色の変化や太陽の光の暖かさを改めて感じる。

【テーマ】空・天候

【活動名】パジャマパーティー（9月）

【年齢】5歳児

【ねらい】・昼間見ている風景が闇の中ではどのように見えるのか友達と一緒に観察することを楽しむ

・夜明けの空の色の変化を観察したり、太陽の光の暖かさを感じる

【活動内容】

1. 活動の背景

ある日、山道を歩きながら子どもの1人が言った。「夜までくじら雲にいてみたい」他の子どもたちに話したところ、みんなくじら雲に泊まりたいと言う。そこで、別の日の夕方、年長児だけくじら雲の拠点に集まり、1泊2日のパジャマパーティーをすることにした。

2. 活動の展開

計画

夏頃から何回も年長児だけで集まり、パジャマパーティーの計画について話し合いをした。どんな食事をどのように作るのか、夜、みんなでどんなことをしたいか。9名の子どもたち、みんなが納得するまで話し合いをした。

子どもたちは食事のメニューを決めるのに、アレルギーや好き嫌いも把握し、みんなが食べられる物、自分達で作れる物を選んで取り入れた。夜の探検と花火もやることにした。

パジャマパーティータイムスケジュール

※保護者向け通知から抜粋

9月26日（金）

16：00 集合

16：00～17：00 夕食準備

17：00～18：00 夕食

18：00～18：30 片付け

18：30～19：00

就寝準備、ナイトウォーク

19：30～20：00 お話、就寝

9月27日（土）

5：30～6：00 起床、洗顔

6：00～6：30 散歩

6：30～7：00 朝食準備

7：00～7：30 朝食

7：30～8：00 片付け

8：00～8：30 解散

持ち物・・・子どもさんと一緒に用意してください。

- ・パジャマ、着替え
- ・寝具（寝袋、布団など）
- ・洗顔用タオル
- ・歯ブラシ
- ・箸、食器、水筒

※心配なことがありましたらご相談ください。1日目送って来られる際、保護者の皆さんは早めにご帰宅ください。お別れする時間が長くなると不安が出てきてしまうことがありますので、里心がつかない内にあっさりとお帰りください。

集合

待ちに待ったパジャマパーティー当日。里心がつかない内に保護者の方に帰ってもらうのと、明るい内に夕食準備を済ませ、夕闇を感じることができたらという思いから、16時というまだ明るい内に集合した。



ナイトウォーク

夕食を済ませ、すっかり夜になると、夜の探検、ナイトウォークに出かけた。

「おぼけになる!」と言っていた子ども、暗闇の中に立つと「やっぱり、やめる」という。「やっぱり、夜の探検やめればよかった」と言いながらも、手を強く握り合い、歩みを進めた。いつも歩いている山道、いつもは走り回っている山道であるが、闇に包まれ、子どもたちは怖れを感じ、友達や保育者との距離を縮めることで安心しようとしていた。



山にいる動物たちのようにライトを点けずに歩くこと、耳を済ませるためにきつねのように音をたてない歩き方“フォックスウォーク”で歩くこと、話したい時には小さな声で話すように伝え出発した。

星や月の光を見つけ、ほっとしたように嬉しそうに発見を言葉で伝える子どもたち。山の上から見る町の夜景もきらきらして見える。

途中でしゃがみ、どんな音がするか。無言で聴くことに集中した。どんな音が聞こえたか話してみる。虫の声、ふくろうの声、町の車の音など。そして、もう一度、無言で聴くことに集中した。鹿の鳴き声、どこ

から聞こえるか、聞えてくる方向に目を凝らした。

ある地点で、10m程をたった1人で歩く体験をした。〇〇ちゃんが怖がって泣き始めるとみんなが「〇〇ちゃんなら、できるよ」と励まし、頑張って歩くと「よく頑張ったね」「えらいじゃん」と褒めていた。ほんの10mだが、昼間とは違う緊張感で勇気を持って歩いた子どもたち。全員が歩き終わって一緒になると共に無事を喜び合い、互いの勇気を認め合う姿が見られた。

その場で闇の中では色がどのように見えるか、体験した。衣服の色は何色が問いかけてみた。口々に色を言う子どもたち。ライトを照らして衣服の色の確認。闇の中では違って見えることに気付いた。夜の木や木の葉も見上げてから、ライトを照らし、違いを感じた。

闇の中をドキドキしながら歩いてきた子どもたちはくじら雲の拠点に戻り、灯りを感じてほっとした様子。その後、花火を楽しんだ。

翌朝、目覚めた子どもたちは夜明けの空の色を見て、感動と同時にほっとした笑顔が見られた。明るくなって、昨晚と同じコースを歩いた。歩くスピードが昨晚より断然早かった。

【子どもたちの育ち】

いつもの風景が太陽の光の下と闇の中ではまるで違うもののように感じていた様子がうかがえた。夜空の月や星の美しさと同時に闇の怖さも感じた。それが人と人の距離を縮め、人と一緒にいる安心感と楽しさを感じさせてくれた。そして、闇を感じたからこそ、朝になり、太陽の光の存在を再認識したようだった。

この活動を通して寝食を共にした仲間同士のつながりも深まった。

【この事例に対する保育者の思い】

家族から離れ、2~3年間共に過ごしてきた仲間と一緒に過ごす1泊2日。夕闇から闇、夜明けと空の移り変わりが子どもたちの心理にも影響していくことを感じた。仲間と一緒に過ごす安心感の中で、普段体験しない闇の世界を感じ、将来、人間の存在の小さいことと人間の存在の大きいことの両方を考えることにつながるのではないかと思った。

生き物と関わる活動

野山にいるさまざまな昆虫は、姿形もユニーク。透明な羽に大きな目をしたトンボ、強そうな角を持つカブトムシ、美しい羽でひらひらと舞うちょうちょ、纏まえるとくるっと丸まるダンゴムシ、三角の頭でカマを振り上げるカマキリ、草むらからピョンと飛び出すバッタ…どの虫の動きも、子どもたちには不思議の宝庫です。梅雨時はカエルやカタツムリを探しに行きましょう。カタツムリって、にんじん食べると赤いうんち、きゅうりを食べると緑のうんち！こんな気づきの中に、どんな小さな生き物にも宿る、いのちへの驚きが詰まっています。現代の生活の中で、子どもたちが虫や小動物と関わる機会はますます減っています。自然の中で出会うさまざまな生き物とのかかわりの中で、いのちの不思議さと尊さについて学んでいくことは、とても大切なことなのです。

生き物との多様な関わり方

- 田畑で土の中の生き物を見つける
- 野山、田畑でさまざまな昆虫や小動物を見つける／つかまえる
 - *春：カエルやカマキリの卵、オタマジャクシ、ヤゴ、メダカ、カエル、カタツムリなど
 - *夏：セミ、トンボ、カブトムシなど
 - *秋：イナゴ、カマキリ、コオロギなど
- スズムシなどの虫の鳴き声を聴く
- セミの抜け殻を見つける
- 虫や鳥の巣を見つける
- 身近に見る鳥の鳴き声やエサの食べ方、飛び方、歩き方をみる
- 鳥にエサをあげる
- 野生の動物に対する接し方(共生、共存)を知る
- 森に暮らす動物の足跡や糞を見つける
- 虫や魚などの小動物を室内で飼う
- うさぎやニワトリ等の動物の世話をする

生き物と関わることによる気づき

- 虫や小動物がどんなところに隠れているのかに気づく
- すべての生き物は、食べて、糞をすることを知る
- 虫や小動物がどんなものをエサとしているのかわかる
- 小動物が残した足跡や糞にそれぞれ特徴があることに気づく
- 生き物がどこにどんな巣をつくるのか観察する
- 虫や魚、カエル、鳥などは卵を産むことを知り興味を持つ
- 虫が幼虫やさなぎなどに変化していくことに興味を持つ
- 飼育している動物にストレスを与えない関わり方を知る
- すべての生き物は、寿命が来ると死んでしまうことがわかる
- 生き物の死を通して、人間の関わり方が飼育する生き物のいのちに直接影響を与えることを知る

生き物がもたらす五感への刺激

- 昆虫のユニークな姿に驚く
- 虫の鳴き声を楽しむ
- 小動物や昆虫の動きを見て楽しむ
- それぞれの生き物に対して接するときの力加減を感じる
- 生き物の柔らかさや温かさを感じる
- 信州の昆虫を食する文化に触れ、食べて味わう



生き物と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- ・身のまわりの虫や生き物に興味を持つ
- ・生き物に触れ、柔らかさや温かさを感じる

○3歳

- ・生き物に触ったり、見たりすることを通して形や行動に興味を持つ
- ・身の回りの生き物を捕まえたり、飼育することから興味を持つ
- ・生き物にあった触り方や捕まえ方、抱き方があることを知る



○4歳

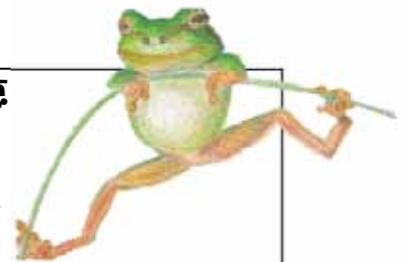
- ・生き物を捕まえたり、飼育することから生き物の生態や習性に興味を持つ
- ・生き物を飼育することを通して生き物にはエサが必要なことがわかる
- ・生き物はちゃんと面倒をみないと死んでしまうことを知る

○5歳

- ・飼育を通し、生き物にはそれぞれにふさわしい環境が必要なことがわかる
- ・うさぎなどの世話を通して、生き物のいのちに責任をもって関わる
- ・生き物と人間が共生するための環境のあり方や関わり方に関心を持つ

大人が子どもに伝えたい生き物との関わり方

- ◆野山には危険な生き物がいることを知り、生態を知るとともに身を守る方法を理解する。
ヘビ、有害な虫・ダニから身を守るために、野山で活動するときは、帽子・長袖・長ズボンを着用し、くるぶしまできちんと隠れる靴下を履くなど、皮膚を露出しない服装をする。
- ◆危険な生き物に遭遇し、刺されたり、かまれたりした場合には、正しい応急手当をおこない、直ちに医療機関に搬送し治療をしてもらう。
- ◆人間と野生動物や生き物が共生・共存することの意味を知り自然環境を大切にすることを育てる。
- ◆その他、人間に害のある生き物を見分ける知識を持つ。



コラム：危険な生き物から身を守るための知恵

- ◆スズメバチやアシナガバチなどに刺されないために
 - ①ハチの巣を刺激しない。 ②黒い色の服装は避け、帽子をかぶる。
 - ③香水などの匂いに敏感なので注意する。 ④飛んできたハチを振り払わない。
 - ⑤姿勢を低くし、できる限り巣から遠くに逃げる。
- ◆クマやイノシシに遭遇しないために
 - ①人間の存在を動物に知らせるため、音が出るもの（笛・鈴など）を身に付ける。
 - ②食べ残し、ガソリン、歯磨き粉などクマや野生動物が好むものを放置しない。
 - ③もし遭遇したら大声を出し、自分の体を大きく見せるなど、動物の特性に合わせた方法で避難する。
- ◆毒ヘビ（マムシ・ヤマカガシ）に遭遇しないために
 - ①ヘビの好む場所（近くに水が流れていて、湿った陽の当たらない場所、茂みや藪があり、石垣や穴などヘビが隠れる場所）には、近づかない。
 - ②ヘビを刺激しない・近づかない・手に持つなどしない。
 - ③マムシなどは夜行性のため、できれば夜間は歩き回らない。
 - ④腰を下ろす時やがけを登るときなど、手をつく際には場所をよく見て確認する。
 - ⑤毒ヘビを見分ける知識を持つ。

学校法人マリア学園 認定こども園 吉田マリア幼稚園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

園で飼っていたカブトムシが死んでしまったことから、たまごを探してみるようになった。結果的にたまごは見つからなかったが、いのちの大切さを学ぶきっかけになった。

たまごが見つからなかったという実体験が、いのちの大切さやありがたさを学ぶことに一層の深みを与えてくれた。

また、たまごが見つければ、いのちの大切さとは別の学びがあったかもしれないし、あるいは、そこで終わりの活動だったかもしれない。このように、自然の中には「偶然の出会い」がたくさん用意されており、そこから多様な学びへと発展させることができる。

【テーマ】生き物

【活動名】カブトムシのたまごはあるかな？

【年齢】5歳児

【ねらい】いのちの大切さを理解する



【活動内容】

秋になり、飼っていたオスのカブトムシが死んでしまいました。子どもたちはとても悲しみ、お墓を作りました。同時に、カブトムシは交尾をすると先にオスが死に、メスはたまごを産んでから死ぬことを、図鑑で調べました。その後、メスが死んでしまいました。

先生

子どもたち

ほんとだね！でもどうしたらたまごがあるかわかる??

先生、カブトムシは死んじゃったけど、たまごが土にあるかもしれないよ

そうだね！お友だちにも話をしてみんなでしらべてみよう

わかんないから、しらべてみる？

今日、お兄ちゃんにも聞いて来るね

「もしかしたら、カブトムシのいた土の中にたまごがあるかもしれない!!」という思いから、どうやってたまごを見つけるか、どんなたまごなのかを調べることにしました。

兄弟に聞いてみたり、図鑑で調べてみたりする中で、カブトムシのたまごは白色でとても柔らかいということがわかりました。また、手で触るとばい菌がついて死んでしまうこともわかったので、スプーンを使って探すことにしました。この時点では、子どもたちも保育者もたまごはきっと見つかるものと思っていました。

先生

子どもたち

ないねえ…どうしてないんだろうね？ もう一回、よく見
てみよう

たまごあるかな？よく探してみよう！
みんなで神様にお祈りすればはやく見つかるかも…。
たまご出てこい！お願い、お願い
……先生、たまごないね

いくら探してみてもたまごは見つからず、子どもたちはがっかりした様子でした。そんな時に、一人の子（S君）がお部屋までの帰り道に、「先生どうしてたまごなかったのかな？」と保育者に話しかけてきました。保育者としては、『残念』と『どうして』という気持ちを大切にしたいかったので、「先生もわからないんだ。お部屋でみんな考えてみよう」と提案しました。

部屋に帰ると、「たまごがなくて残念だった」、「たまごはあると思っていたのに…」、「たまごがなくて悲しい」などと思い思いの感想が子どもたちから出ました。

そこで、「先生もたまご絶対にあると思っていたけど…どうしてたまごはなかったと思う？」と子どもたちにS君の質問を投げかけてみました。すると、日々の園長先生からのお話や、実際に行った畑の体験、虫の飼育などの積み重ねから感じてきたことなどの影響もあって、子どもたちから「いのち」に対する考えや思いがどんどんでてきました。

先生もたまご絶対にあると思ってたけど…どうしてたまごはなかったと思う？

そうだね…。今、頑張って探したけどたまごなかったもんね。難しいのかもしれないね

そうだね。いのちをつくるのは難しいのに、今私たちにものちがあるのは本当は嬉しいことだし、ありがたいことなのかもね

いいこと思い出したね！お誕生日会で神父様が教えてくれたよね。みんなはたいせつなものをいつもどうやって使ってる？

そうだよね！じゃあ、大切ないのちはどうやって大事にするかなあ？

優しくされたらうれしいもんね

そうだよね。今まで一人で大きくなった人はいないもんね。さみしい時とか困った時は優しいお友だちがいるもんね

すごいことに気付いたね！動物も虫も神様がつくってくださったんだもんね

年長さんとってもいいこと考えたね

いい考えだね！お兄さんお姉さんかっこいいね。でもどうやって教えてあげる？

小さいお友だちには難しいかもしれないね。どうやれば伝わるかな？

いのちをつくるのはたいへんなのかな？

じゃあ、いのちがあるのは当たり前じゃないんだね

いのちは大切だよ！神様からのプレゼントだもんね！

優しくつかう！大事にする！

お友だちもいのちだから、優しくする

みんな一人では生きられないんだよ

みんながいるよ！動物や虫にも、いのちがあるよ！心もあるよ！！

みんなおんなじいのちだよ

小さいお友だちにも教えてあげたいなー

月曜日にみんなで発表したい

紙芝居みたいに絵も書いてらうどう？

「年少さんや、年中さんにも教えてあげたい！」というように、小さい友だちにもカプトムシのたまごが無かったことや年長さんが考えたことを伝えたいという声が出てきました。

保育者の「どうしたら伝わるかな？」という質問に「紙芝居みたいにしたい」「月曜日に発表したい」という声があり、早速子どもたちの絵と文字で紙芝居のようなものを数日かけて作りました。

発表の時にはどこか自信たっぷりの年長さん全員が前に立ち、紙を持つ人と話す人に分かれて、発表しました。小さいお友だちのありがとうの声や、園長先生の「すごいことおしえてくれたね」という声にとても嬉しそうで、満足そうな子どもたちでした。

【子どもたちの育ち】

たまごがあると思って行った活動だったので、たまごがなくて残念に感じられたものの、子どもたちの「なぜ？」という部分に、子どもと保育者が共にしっかりと向き合うことができました。毎日のなにげない自然体験が、子どもたちの声や疑問をきっかけに大きな学びや発見に広がっていきました。

【この事例に対する園長先生の思い】

このことがきっかけでお誕生日会での神父様のお話「いのちは神様からのプレゼントだから大切。また、自分のいのちは人のために使えば使うほど大きくなる」ということを思い出す子もいて、自分も、お友だちも、お父さん、お母さんみんなを大切にしたいという意見や、みんなに優しくすることがいのちを大事にすることという話にもなりました。命の大切さについて、3年間大事に伝えてきたことがちゃんと子ども達の心にあることがわかって嬉しい機会になりました。



上田市立すがだいら保育園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

子どもたちが、小川でサンショウウオのたまごを見つけてきた。図鑑で調べたりしながら、サンショウウオの飼育を続けるうちに、子どもたちは小さいのちに対する慈しみの気持ちを持ち、友だちとともにサンショウウオが育っていく姿を見るのを楽しみにするようになった。また、大人になったサンショウウオが今までのエサを食べなくなり、飼育が難しくなったときに、生き物のためにどうするのがよいか子どもたち同士で真剣に話し合い、友だちの意見を聴いて川に返すという決断をした。

自然に棲む生き物には、それぞれ棲み処に適した環境があり、人間の思い通りに育てることは難しい。自分よりも弱い小動物の飼育の経験を通して、子どもたちはいのちのかけがえのなさに気づき、思いやりの心をもつとともに、ぶつかり合っていた友だちとも話し合いを通して意見を言い合わせ、お互いに認め合うことができるようになっていく。

【テーマ】生き物

【活動名】サンショウウオの飼育を通して

【年齢】5歳児

【ねらい】自然の中で出会った小動物のいのちに触れる経験を通して、友だちの思いや良さに目を向ける

【活動内容】

サンショウウオの飼育を通して

4月12日 〈サンショウウオのたまごを見つけたよ〉

子どもたちが、小川でサンショウウオのたまごを見つけ、喜んでバケツに捕ってくる。「何サンショウウオのたまごだろう?」と言いながら見ているので、「部屋にある図鑑で調べてごらん?」と保育士が提案する。いろいろな図鑑を調べたが、同じたまごのサンショウウオを見つけることができなかった。数日後、保育士がインターネットで調べて、クロサンショウウオのたまごとわかり、画像をプリントして持っていくと、「あー、本当だ!これと同じ」と何度も写真を眺めていた。子どもたちが観察しやすいように水槽に写真を貼り、玄関に置くことにする。

5月2日 〈サンショウウオの水を交換する〉

たまごから赤ちゃんが生まれ、毎日水槽を眺めることが楽しみな子どもたち。C児は、気になるものの「気持ちわるい」と言ってあまり親しみが持てない様子だった。保育士がサンショウウオの水槽の水を交換していると、「先生、何しているの?」とC児が寄ってきた。「水をきれいにしているんだよ」と答えると、「私もやりたい」と言うので、おもちゃのカップを渡し、サンショウウオを水槽に移すのを手伝ってもらう。「金魚すくいみたいだね」と喜んで手伝うC児。見ていた周りの子も「やりたい」と言い、交代でサンショウウオを新しい水の中に移してくれた。

5月24日 〈サンショウウオの手足が生えてきたよ〉

C児が「先生、サンショウウオに手と足がついているよ」と知らせてきた。見るととても小さい手と足が生えていた。「わあ~本当!小さい手だね」と答えると、C児も嬉しそうにし、登園する友だちに知らせていた。

5月29日 〈サンショウウオを観察しよう〉

手足が生えてきたサンショウウオを1匹ずつカップに入れて観察し、気づいたことをみんなで知らせ合った。「小さい手と足がついてる」「長いしっぽがある」「目が小さい」など、気づいたことを口々に話す中で、「顔の横にヒラヒラした手のようなものがいっぱいついてるよ」と気づいた子がいた。保育士が「それなんだろうね」と問いかけると、「手じゃない?」「泳いでるからヒレだよ」と考えている様子だったが、A児が「それはエラだよ。水の中にすんでいるからお魚みたいにエラがあるんだよ」と教えてくれた。クラスの友だちも「Aくんすごーい!」と感心していた。普段は相手の思いを考えずに、友だちの気に障ることを言うてしまうA児だが、友だちに「すごい」と褒められて、とてもいい表情を見せていた。

7月2日 〈サンショウウオが大人になる〉

サンショウウオが大人(成体)になり、水から出て石の上を歩いたり、水槽の壁をよじ登るようになる。子どもた

ちは、「ピック君」と名前をつけ、エサをあげるなど世話をしてきたが、大人になってからエサが変わってしまったようで、ミミズなどのエサを食べなくなってしまった。「何にも食べなくなったよ」「大丈夫かなあ」と心配し、「何を食べるんだろう？」と子どもたちは図鑑で調べようとしたが、サンショウウオの飼い方はどの図鑑にも載っていなかった。保育士がインターネットで調べてみると、大人のサンショウウオはワラジムシを食べることがわかった。

7月19日〈サンショウウオを川に戻す〉

男の子たちは、園庭で遊んでいるときにワラジムシを見つけると、サンショウウオにあげてみるが、全く食べようとせず、子どもたちからも「ピック君小さくなってきたね」との声が聞こえるようになってきた。そこで、そのことを他の子どもたちにも知らせ、みんなでどうしたらよいか話し合いをする。

女の子たちからは「かわいそうだから逃がしてあげよう」という意見が出されたが、男の子たちは「逃がすのはいやだ」と言う。保育士から、ピック君の気持ちになって考えてみようと言った。子どもたちからは「また虫を捕まえればいい」「でも食べなかったよ」「ピック君はおしゃべりできないからどんな虫が好きかわからない」「ずっと入れ物の中に入っていて、好きなものが食べられないのはかわいそう」…などたくさんの考えが出された。

話し合いが進むうちに、男の子たちの中からも「ピック君、やっぱりお腹がすいてかわいそう」「逃がしてあげた方がいい」と気持ちが変わっていく子が出てきて、最後はみんなが逃がした方がよいという結論になり、たまごをとった川に逃がしてあげることにした。

【子どもたちの育ち】

この地域では、観光業を営む家庭が多く人の出入りが多いことから、子どもたちは多くの大人と触れ合い、いろいろなことを見聞きしています。そのため、言葉も発想も豊かなところがある反面、自己主張が強く、友だちの意見を否定したり、揚げ足をとったりする子の姿も見られました。

サンショウウオという小動物を飼育する経験を通して、いのちを慈しむ気持ちが芽生え、生き物の育ちについての気づきや感動を友だちと共有することで、自然と友だちを大切にしようという気持ちが育まれていきました。また、大人になったピック君を逃がしてあげるかどうか、意見が分かれたのですが、保育者が寄り添いながら丁寧に意見を聴き取っていったことによって、最後は友だちの意見を受け入れ、生き物を思いやって森に逃がすということを決めて、子どもたちの心は一層大きく成長したように思います。

【この事例に対する園長先生の思い】

すがだいら保育園は自然の恵みを日常的に感じることができる豊かな環境にあり、周辺には緑豊かな木々が繁り、園の周りには高原野菜の広々とした畑が広がっています。菅平では、多くの家庭が旅館・ペンションの経営や大規模な農家経営に携わっています。観光シーズンや収穫期は多忙になるため、保護者の方からは「忙しくてなかなか子どもに関わってられない」という声も聞かれました。

そこで「一人一人のありのままの姿を受け入れ、安心できる場を作る」ために、子どもたちが自然の中で思う存分遊ぶことで、自分を発揮し、心豊かな子どもになるよう保育士と心を合わせていこうと考えました。自然の中でたくさん遊ぶことを通して、人との関わり方も学んで欲しいと思い、「自然の中へ出かけ、子どもの思いや発見に共感することで自己肯定感が持てるようにしよう」と方針を決めました。

子どもたちは、年中毎日のように自然の中へ出かけ、木登りをしたりいろいろな植物や虫取りをしたりして遊んでいます。自然の中で出会った小動物や植物の命に触れる経験を通して、友だちの思いや良さに目を向けることができるよう、意識して関わりました。



火と関わる活動

火は暖をとったり、調理をしたりするために欠かせません。たき火や囲炉裏を囲み、ぱちぱちと薪が燃える音を聞きながら、炎を見つめていると、自然と心が安らぎます。たき火やかまどでさまざまな調理をするのは時間も手間もかかります。また、火をおこすには風の向きや強さを見たり、良く燃える乾いた素材を集め、落ち葉・小枝から太い木片へ燃え移らせるように、徐々に火を育てていく必要があります。知恵も経験も必要です。苦労して火をおこし、薪を拾って火を維持する経験を積むなかで、子どもたちは、人間が古来温かい食事をするために行ってきた営みを体験的に知ることができるでしょう。また、火は扱い方を間違えれば危険なものです。火の始末を学び、付き合い方を体得することが大切です。

火との多様な関わり方

- たき火にあたる
- たき火に薪をくべる
- よく燃えそうな薪を探す
- たき火で調理する
- かまどでパンを焼く
- マッチを擦る
- 火をおこす
- 提灯に灯をともし
- 蝋燭に灯をともし

火がもたらす五感への刺激

- 火の温かさを味わう
- 炎の色を楽しむ
- 蝋燭の炎のゆらめきを楽しむ
- ぱちぱち燃える音を楽しむ
- 鼻や喉で煙たさやにおいを感じる
- 火で煮炊きした食べ物を味わう

火と関わることによる気づき

- よく燃える素材に気づく
- 乾燥の度合いや木の種類（針葉樹・広葉樹）によって、薪の燃え方が異なることに気づく
- 空気を送ると火が変化することを知る
- 落ち葉や小枝を立体的に組むとよく燃えることに気づく
- 燃えたあとの木が炭になることを知る
- 炎の明るさや熱の力に気づく
- 煙の色やにおいを知る
- 風向きと煙のたなびく方向との関係に気づく
- 栗などを直接火に入れると、はじけることを知る
- 火は危険なこともあるが人間の生活に必要なものであることに気づく



火と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- ・大人とともに火にあたり、温かさを味わう
- ・大人とともに火に近づき、手をかざしてみたりすることで火に親しみを持つ



○3歳

- ・落ち葉や薪を火にくべてみたりすることで、火に親しみを持つ
- ・薪拾いをすることで、木の重さや樹皮の肌ざわりなどにより、よく燃えるものと、あまり燃えないものがあることに気づく
- ・火の後始末の方法を知る

○5歳

- ・マッチなどを使って火をおこすことに挑戦する
- ・落ち葉などさまざまな素材を用い、組み方や風向きを工夫して、火をおこす方法を考える
- ・うちわなどの道具を使って、空気を送ると火を大きくすることができることに気づく
- ・交代で火の番をするなど、仲間とともに責任をもって火に関わろうという思いをもつ
- ・火の後始末を確実にする

○4歳

- ・大人や年長の子どもの様子を見て、どうやって火をおこすのか興味を持つ
- ・火の勢いを維持したり、もっと大きくしたりするためにはどうすればよいか考える
- ・火をつかった調理を楽しむ
- ・火の後始末の方法を知る

大人が子どもに伝えたい火との関わり方

◆森林の環境を守ることも重要であるため、直火*による火事や、土壌・樹木の破壊などに留意し、周辺の環境を壊さないように気をつけることを教える。

*直火：直接地面の上で行う焚き火のこと

◆火は、大変魅力的だが、子どもだけで扱うには危険も伴う素材である。年齢の幼い子どもたちが、マッチなどを使うことに対して強い興味や好奇心を持つことがあるが、この好奇心や探究心を正しく育てるためにも、マッチや火を扱うときは必ず大人がいるところであることを約束させる。

◆たき火や火を使った後の始末を正しく教える。

- ・土を軽くかけるだけでは、炎は消えたが炭はくすぶったままになるなど、火事や事故の原因となる状態になりやすいので、しっかりと消火する。
- ・消火された炭でも乱雑に放置せずに後始末をきちんとする。
- ・自然に還らない人工物については必ず持ち帰る。

◆たき火をするときには・・・

- ・周りにある燃えやすいものを取り除いてから焚き付ける。
- ・乾燥している季節や風が強いときには、たき火は控える。
- ・たき火をする場所は風当たりの少ない窪地などで行う。
- ・たき火後は確実に消火をおこない、消火を必ず確認する。

NPO法人山の遊び舎 はらぺこの事例

《信州型自然保育実践ポイント》

この園では「火」と日常的に関わることができる機会を設けている。

「火」の存在が五感を刺激し、気持ちを高めていくのと同時に、「火のある生活」によって心穏やかに、自分の時間とペースで自分に向き合うことができる。ささやかな風景が持つ豊かな場面一つひとつを、まわりの大人たちも含め共有できれば、日常生活の中に潜む風景一つひとつが豊かな自然体験となっていく。

【テーマ】火

【活動名】たき火百景（通年）

【年齢】3歳児、4歳児、5歳児

【ねらい】移ろう季節の中で「火」と関わり、生活や遊びに取り入れられる

【活動内容】

背景

「火」の存在を子どもの生活の中で日常化していきたいというねらいから、毎朝子ども（年長児）がマッチでたき火に火をつけ、調理をしたり、暖をとったり、遊びに活用している。



景色1：マッチからたき火を

朝一番早く登園してきた女兒が、焚きつけの松葉にむかってマッチを擦るが、なかなか火がつかない。数回マッチを擦った後、マッチが湿っていて火がつきにくいのでマッチを交換してほしいと保育者に伝えてくる。

新しいマッチに替えるとすぐに火が点き「マッチかえたからすぐついたー」と嬉しそう。

「てんきがわるいと（湿っていて）つきにくいんだよねー」と、たき火のもくもくと上がる白煙を目で追いながら言っていた。

景色2：たき火で美味しい焼栗のシーズン

庭の栗の木が実を落とし始めると、登園と同時に木の下に駆けて行き、栗を拾おうとする姿が多くなる。年齢が上になるほど、栗の実の色づきの変化に敏感になる。

足を使って器用に栗をイガから出し、虫に喰われていないかを確認する。

年長男児に栗の焼き方を教えてほしいとお願いしてみた。

拾った栗を直接たき火に入れようとする、「キズをつけてからいれなきゃ（破裂するから）ダメ！」と制止された。

火ばさみで切れ目を入れてたき火に入れると、「そこじゃこげちゃう」と再度指摘を受けた。

炎に近づけすぎると黒く焦げるばかりで中までおいしく焼けないとのこと。

炎から適度に離れた場所に子どもたちの栗が並んでいた。「これはオレの。これは〇〇ちゃんの。」どれが誰の焼いているものなのかを承知している様子。

鬼皮の切れ目が割れ、黄金色の栗が見えてくる。「どう？もういいかな？」と尋ねると「うん。やけてる。」とOKが出た。

熱々の栗を火ばさみでたき火の外へ出し、用心深く熱さを確かめながら鬼皮を剥くと、黄色みの濃くなった栗が出てくる。口に入れると「おいしい？」と確認してくる。うなずくと満足げに自分の栗の世話を続けた。

栗がとれ始めた頃はさほど興味を示さなかった年長女兒の1人は連日他の子どもたちが栗を焼く様子を見ているうちに自分でも焼いてみようと思ったよう。

栗を1つだけ拾ってきて、友だちの真似をして焼いてみる。焼けた栗を食べてみて、にっこり。

再度1つ栗を拾い焼いていた。焼けたところで「おいしい？」と声をかけると、「あげる。」と味見用に栗のかけらを手渡してくれた。顔を覗き込みながら「おいしい？」と尋ねてくる。うなずくとにっこり笑った。

景色3：たき火で特製クッキーを焼くよ

4月当初から続いている土を使つての遊び。団子を作ったりままごとしたりする姿が途切れることなく続いている。

年長男児が泥団子2個を平らにつぶし、たき火台の上のせてあった網の上で焼き始める。

少しずつ色が変わってくる様子から焼きしまり具合を確認している。

しばらくすると「クッキーやけたよー！」と、焦げ目のついた“クッキー”を火ばさみで慎重にはさんで、網から下ろす。

大きめの葉っぱ（オオバコ）を摘んできて、焼きあがったクッキーをそっと葉の上のせて包み、「クッキーやけたよ。あついからね。」とまだほかほか温かい包みをにこにこしながら渡してくる。

男児の見ている前でそっと包みを開けると、焼きあがったクッキーが入っており、「おいそー」と言うと、ニコッと笑う。

周囲にいた子どもたちも包みの中のクッキーをのぞき込んでいた。



景色4：冬の朝、たき火と一緒に

冬休み明け初日。登園してきた年少男児が何をすともなくたき火に近寄ってきて、火の世話をしている。

火ばさみを片手に薪をくべては、火が小さくならないように番をしている。

そこへ登園してきた別の年少男児が加わった。焚き火が長期休み明けの朝の2人のよりどころとなっている様子。2人で笑って会話しながら火の番を続けていた。

その日の午後の散歩では、急な斜面の登り降りをしたにもかかわらず、年少男児は木の枝を数本抱えて戻ってきた。「あしたのまきにするんだ。」とのこと。

その日以降も火ばさみやうちわを片手に火の番をする男児。たき火に集まってくる友だちと火を眺めながらおしゃべりしては、朝の時間を過ごしている。

景色5：たき火がもたらす水の変化 その1

たき火台の上に片手鍋を置き、お湯を沸かそうとしている年長男児。

鍋に入れた水の温度を時々指で確認しながら「まだぬるい。」と、なかなか沸かないお湯を気長に待っている。

「ゆげがでてきた。」と言って鍋に指を入れるが、まだ希望する温度になっていない様子。

水がお湯になるまでの変化に見入った時間となった。

同じたき火台では、バットに入れた氷をたき火でとかそうとする年少男児の姿もあった。

熱を加える事で変化する氷の様子に不思議さを感じていたかのようだった。

景色6：たき火がもたらす水の変化 その2

朝、外遊び用の鍋の中に残っていた水が凍っているのを見つけて「こおりをとりたい。」と保育者に鍋を持ってきた年少男児。

「取れないね。どうやって取ろうか。」と問いかけると「あそこにおく。」とたき火を指さす。

少しこわごわながらも自分でたき火台の端の方へ置いた後、内側まで押す。

とけかかった頃「そろそろいいかもね。」と声をかけ、保育者が鍋をたき火から離す。

「あっとれそう。」と鍋を逆さにして地面にとけかかった氷を出していた。

【子どもたちの育ち】

「熱くて危険なもの」という認識が高い「火」ですが、使い方次第で心の拠り所になったり、遊びの幅を広げてくれるものになったり、おいしいものを作るときには欠かせないものになったりします。その事にそれぞれの生活体験の中で気がつきながら、上手に向きあっていく子どもたちの姿勢が、暮らし全般にたのもしさを感じさせます。

【この事例に対する保育者の思い】

人の暮らしに欠かせないものでありながら、生活の中で子どもとの接点が遠ざかりつつある「火」に向き合うことで、なにげない風景を紡いでいくことの大切さをあらためて感じます。子どもたち一人ひとりの心の中にも、「火」と「暮らし」の結びつきの大切さと豊かさを燈していきたいと思っています。

人・地域・文化と関わる活動

人が住む場所には、それぞれの土地の文化があります。子どもが育つ家庭も保育施設も、地域の共同体のなかに根付くことで、より大きな広がりをもった社会との結びつきを得ることができるのです。地域に古くから伝わる伝統行事を知りましょう。古来からのお祭や伝統行事は、もとはその土地の自然を鎮めるために、神に祈る儀式であったのかもしれませんが。自然の中で生きることは、その土地で同じく自然と向き合っている人びとと支え合い、つながりあうことでもあります。春のぼたもち、よもぎもち、秋のおはぎ、冬のやししょうまなど、季節ごとに家庭で作る郷土料理に親しんだり、正月のしめ縄飾りや小正月のまゆ玉を、地域のお年寄りと一緒に作ったりすることで、地元の文化により深く触れることができるでしょう。

人・地域・文化との多様な関わり方

- 近所の人にあいさつする
- 近くの町や商店街を散歩する
- 近くの神社やお寺の境内を散歩する
- 小学校・中学校の子どもたちと交流する
- 季節ごとの行事を知る
- 郷土料理を作る／食べる
- 地域のお祭に参加する
- 地域の人に畑仕事を教えてもらう
- 地域の福祉施設を訪ねる
- 地域に住む人々を施設に招く／もてなす
- 地域に伝わる伝統行事の意味を知る
- 地域の名産品・特産品を知る
- お年寄りに伝統的な遊びを教えてもらう
- 地域の歴史を知る
- 地域に伝わる昔話を聞く

人・地域・文化がもたらす五感への刺激

- 人とあいさつをしたときのすがすがしさを
感じる
- 神社やお寺の境内の匂いや空気を感じる
- 旬の食材の味やにおい、色などを感じる
- お祭の賑やかさや華やぎを感じる
- 郷土料理の味を味わう
- 温かいまなざしや声を感じる

人・地域・文化と関わることによる気づき

- 多くの身の回りの人に大切にされている
ことに気づく
- 身の回りにあるいろいろな文化財、施設や
お店などの存在を知る
- 行事から季節の移り変わりに気づく
- 郷土の料理から食材に興味を持つ
- 郷土の料理から食材の加工や扱い方の知
恵を知る
- 地域の伝統行事やお祭に参加し楽しむこ
とで地域への親しみが持てるようになる
- 昔の知恵の素晴らしさ（無駄にしない、合
理的、工夫）を感じる
- ささまざまな年齢の人と関わることにより、
それぞれの人にあった言動の仕方を知る
- ささまざまな年齢の人と関わることにより、
自分も人の役に立てることがあることを
知る
- 父母や祖父母、兄弟姉妹がいることをうれ
しく感じる



人・地域・文化と関わる活動における各年齢のねらいの例

○3歳未満

- ・近所や地域に散歩に出かける
- ・保育者が近所の人とあいさつをすることを真似てする
- ・郷土料理を味わう
- ・地元の旬の食材を味わう

○3歳

- ・神社やお寺の境内など近所や地域に散歩に出かける
- ・近所の人とあいさつをする
- ・家族（保護者）や保育者と地域の祭りや伝統行事に参加する
- ・地域のお祭や伝統行事に参加することで楽しさを味わう

○4歳

- ・近所の人とあいさつをするすがすがしさを感じる
- ・近所や地域の人と触れ合いさまざまな仕事や役割があることを知る
- ・家族や保育者と地域のお祭や伝統行事に参加することで、大人の活躍の姿に触れ、憧れを持つ

○5歳

- ・さまざまな人と出会うことから、それぞれの人にあった言動をすることを知る
- ・身近なたくさんの方の仕事を知り、たくさんの方に支えられて生活していることを知る
- ・多くの人に支えられて生活していることを知り、感謝の気持ちを持つ
- ・自分も人の役に立てることを喜ぶ

大人が子どもに伝えたい人・地域・文化との関わり方

- ◆日本人にとっての自然は、信仰や生業・生活など恵みをもたらすものである一方、時には脅威をもたらす存在でもあった。しかし、今、われわれは自然に対する畏敬の念を忘れ、自然環境の破壊などが各地で起こっている。次世代の子どもたちに大人が残していかなければならないことは、豊かな自然と、日本人が自然と共に生きてきた知恵や心であろう。
- ◆子どもの原体験において人とのかかわりは重要である。人から大切にされた感情は一生の宝となる。そのためにも大人は、地域の中で子どもたちのために、人とのつながりの姿を見せていきたい。
- ◆地域で継承されている文化や過去の歴史は、これから生きていくための知恵となる。たとえば、過去の災害などの記憶は、先人の教えや昔話によって受け継がれている。このような伝統や文化を子どもたちにも伝え、大切に守り継承したい。
- ◆さまざまな文化や価値観、多様な世代、異なった国の人を敬い、また、自然などあらゆるものとも共生する心を伝えたい。そのために、子どもが家庭の温かさを感じたり、それぞれの役割を知り、自分が人のために役に立つという喜びを感じられるように大人は努力したい。



高山村立たかやま保育園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

地域のおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に野菜栽培などを行う「一緒に楽しみ隊」活動を行い、日頃から地域と子どもたちが密に関わりあっている。

自分の祖父母に限らず、地域の方々と幅広く継続的に接することで、地域への感謝の気持ちや愛着が育っている。地域としても、子どもと接することに喜びを感じられ、日頃から子どもに目がいくようになる。それが「地域連携」や「地域の教育力向上」にもつながっていく。

また、自然に対する「知恵」というのは、大人から子どもへと伝えていく必要がある。地域と子どもたちが接することは、自然に対する「知恵」を伝える良い機会にもなる。

【テーマ】人・地域・文化

【活動名】「一緒に楽しみ隊」活動を通じた地域とのふれあい（通年）

【年齢】3歳児、4歳児、5歳児

【ねらい】地域の大人と交流を図る（⇒地域連携や地域の教育力向上に資する）

【活動内容】

たかやま保育園では、平成 21 年度から、地域のおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に農作業を行う「一緒に楽しみ隊」活動を行っています。

一緒に楽しみ隊では、年間を通して、畑をおこすことから種まき、栽培、収穫までの全てを一緒に行います。

毎回参加してくれる方もいれば、たまに参加の方もいます。無理のない範囲で参加できることが、この取組の長続きの秘訣かもしれません。



参加してくれるおじいちゃん、おばあちゃんは、園児の祖父母である必要はなく、地域に暮らす方であれば誰でも参加していただいています。そうすることで、孫がいる家庭でもそうでない家庭でも、地域全体がたかやま保育園の子どもたちと関わるのが可能になります。子どもたちとしても、地域で暮らすたくさんの方々を知る機会になります。

一緒に楽しみ隊では、おじいちゃん、おばあちゃんが農具の名前や使い方や、野菜の育て方を子どもたちと保育士に教えてくれます。

最初は緊張している子どもたちですが、作業を重ねるごとにお互いの壁はなくなり、

「おじいちゃんどうやるの？」

「教えて！」

などと、子どもたちから積極的に話しかけるようになってきました。

おじいちゃんおばあちゃんたちも、自分の孫と接するかのように優しく、わかりやすく教えてくれて、この活動を楽しんでくれているようでした。

たかやま保育園では、一緒に楽しみ隊以外でも、一人暮らしの高齢者に贈り物をしたり、園の行事に招待するなどして、地域との関わりの機会を積極的に設けています。



【子どもたちの育ち】

最初から最後まで一緒に野菜を作るということで、連帯感や協力する楽しさを味わい、社会性の基盤が養われています。

【この事例に対する園長先生の思い】

祖父母の皆様には、いつも教えていただくことがたくさんあります。地域の子も達は全て「我が孫」。そんな気持ちを持って接して下さる姿に頭が下がります。

保育園側としては、「これでいいのか」「もっと大勢の方が参加できる工夫ができないのか」「祖父母におまかせになってしまっていないか」、といった迷いや反省は多々ありますが、細々でも続けていける大切さを感じます。

これからも地域の皆様とのふれあいを大切に、そのお声を聞きながら交流をすすめていきたいと思っています。

松本市神田保育園の事例

《信州型自然保育実践ポイント》

身近にある山の四季折々の自然と接する中で、子どもたちは季節ごとに変わる風景を見て楽しみ、感じ、想像しながら、さまざまな体験を重ねた。

長野県では、少し歩けば豊かな自然が広がっている。園の周辺に広がっている自然は、その地域ならではの植物や動物などで構成されており、四季の中で変化する独自の生態系に触れ合う中で、子どもたちは身近な草花の美しさを楽しんだり、森で拾った自然物から想像力を膨らませて制作に取り組んだりする。日常のひとつこまとして、地域の自然と触れ合う体験が、原体験として子どもたちの心に深く刻まれ、身近な環境を守ろうとする意識を育む。

また、多様な体験ができる自然が地域にあることによって、子どもたちの地域に対する愛着が深まっていく。

【テーマ】人・地域・文化

【活動名】地域と共に ～千鹿頭山の四季折々の自然に触れながら～

【年齢】未満児、3歳児、4歳児、5歳児

【ねらい】・自然と触れ合う中で、屋内では見られないものを見て楽しんだり想像を膨らませ

・身近な地域の自然と接する中で、地域への愛着を深める

【活動内容】

私たちの神田保育園は、松本市の中でも比較的中心部に位置していますが、園の周りは、豊かな自然に恵まれています。散歩では、自性院始め、弘法山、千鹿頭山など神田地区の自然を満喫できる場所があります。

中でも千鹿頭山は、園から近いので未満児でも気軽に歩いて行ける場所となっています。四季折々の自然の変化を子どもたちも肌で感じることができます。



春は、草花や小動物に触れられ千鹿頭池の鴨たちの優雅に泳ぐ様子を見られます。

夏には、涼しい木陰で涼むことができ、生まれたての鴨の子どもも見ることができます。

秋には、さまざまな木の実や落ち葉が一面に敷きつめられている様子を感じられます。

冬は、池にはった氷や霜柱を見たり、触れることができます。

このように、一年を通して自然を楽しむことができる場所となっています。

四季を通じて出かけている千鹿頭山から自然物を持ち帰り、製作を楽しみます。草花を摘んできては室内に飾ったり、たんぼぼ笛、葉っぱの船などを浮かべて楽しみます。小さな枝や松ぼっくりを拾って、色々な飾りを作ること多いです。

山に落ちていた松ぼっくりの中には、森に棲んでいるりすがエビフライ形にかじった「エビフライ松ぼっくり」や、かじり方によって形が変わった「パイナップル松ぼっくり」が混じっています。

ある日の散歩のとき「あーエビフライだ」と言うと「どれどれ」と子どもたちが集まってきました。「ほんとだー、これどうやってこんな形になるの」「それはね、この山のどこかにりすさんのお家があって、お腹がすくと松ぼっくりを食べに来るんだよ」「そっかーみんなにみつからないように食べているんだね」「松ぼっくりを食べているりすさんに会いたいな」と想像は膨らむばかりです。

そんな話の後、目が慣れてきてエビフライ松ぼっくりをみつけやすくなったのか「ここにも、あっちにもあったよ」と次々に見つけてきてくれました。普通に歩いているだけではみつけれないエビフライ松ぼっくり。こんな風に、歩きながら普段見られない物を子どもたちと一緒に見つけたり、そこから、想像を膨らませてわくわくしたりする体験ができるのも自然の中だからこそです。

また、さまざま体験ができる千鹿頭山のような場所が地域にあることによって、地域に対する愛着が子どもたちの中に確実に深まっているのではないかと思います。

このエビフライ形やパイナップル形の松ぼっくりをたくさん集めて、お店屋さんの中で何かに使えたらいいなと、子どもたちとともに構想中です。散歩に行くたびに子どもたちと一緒に少しずつ集めていこうと思っています。

この他に、未就園児交流のときに小さなお友だちに渡すプレゼントを、少し大きめの松ぼっくりを使った松ぼっくりの剣玉にしました。遊べるおもちゃとしてクラスでも遊んだり、未就園の友だちに渡すプレゼントにもなりました。



【子どもたちの育ち】

四季折々の自然の中で、その季節ならではの自然の様子を見て楽しみ、想像力を育みました。また、松ぼっくりやどんぐりなど、小動物のエサになる植物の形から、森に棲む生き物にも思いをはせ、身近にある自然の山を大切にしていこうという気持ちが生まれたように思います。

このように、身近に多様な体験ができる場所があることで、子どもたちの地域に対する愛着も、確実に育まれているのではないかと思います。

【この事例に対する保育者の思い】

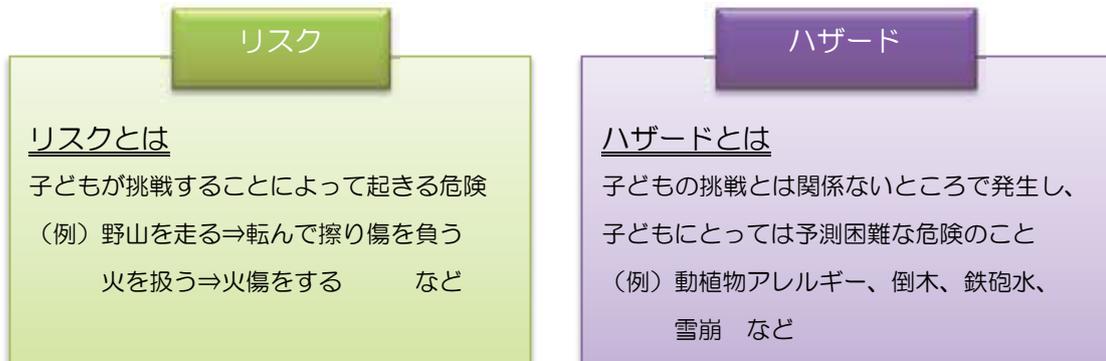
身近な地域に散歩に出かけ、その中で触れて、遊んで、みつけたものを使って保育することは、子どもたちの五感を育てるのにも最適だと思います。自分たちが見つけたものや遊んだものからイメージを膨らませ、出来た作品は世界にたった一つしかない素敵な作品になります。

これからも一年を通じて、園の周りのいろいろな場所に出かけ、見たり、触れたり、感じたりしながら保育をしていきたいと思っています。このように、五感を通して自分の地域を感じながら育っていく子どもたちは自分たちの住んでいるこの神田地区を大切に思っていくことと思います。

安全管理編

リスクとハザードの考え方

●リスクとハザードの違い



野山を走れば、時には転んで擦り傷を負うこともあります。木登りに挑戦すれば、落ちて尻もちをつくこともあります。このように、子どもが挑戦することによって起きる危険がリスクです。

子どもたちは、このような小さなリスクを経験していく中で、何が危なくて、どう気をつけたら避けられるのかを学びます。やがて、自分の身は自分で守る力を持てるようになります。

一方で、山や森に生息する動植物によるアレルギーや毒、倒木や枝の落下による危険は、子どもの挑戦とは全く次元が違うものです。これらの危険をハザードと呼びます。ハザードは、大人が事前に対応することで取り去ることや軽減することが可能であり、それは大人の責任でもあります。

子どもの自由な活動のために、事前にしっかり対策を立て、対応しておきましょう。

●ハザードへの対処法

事前に行うこと

- ・保護者からの連絡や本人からの申出によって事前に体調を把握し当日の健康状態について管理します。
- ・アレルギー性疾患や気管支喘息などの疾患を持つ子どもたちは、疾患の程度や治療段階に応じて活動に制限がある場合があるので、必要に応じて保護者と連絡を取り情報提供を求めるなどして、スタッフ間での情報共有をしておきます。
- ・屋外での体験活動には、危険な動植物との接触やそれに起因するアレルギーの問題が考えられますので必要な知識や対策をスタッフ間で共有しておく必要があります。
- ・屋外で体験活動をする際には、なるべく多くのスタッフで下見に行きます。
- ・例年行っている活動であっても、必ず下見に行きましょう。下見に行く際には、活動予定日の一週間前の同じ時間に行くことが望ましいです。
- ・活動内容・場所別に安全点検表や注意すべきポイントを示した一覧を作成し、スタッフ間での共通理解を図ります。
- ・万が一の事故に備えて、記録担当者や避難誘導者、救急車などへの連絡担当者を決めておきます。それら全てを総括するリスクマネジメント担当者を決めておくとなおよいでしょう。

- ・救急車を呼ぶ際に伝えなければならないことを記載できるカードを用意しておきます。また、活動場所の住所も事前に控えておくとい良いでしょう。
- ・最寄りのAEDの所在を確認し、併せて緊急時の使用方法を確認しておきます。
- ・万が一に備えて、避難経路と避難場所を把握しておきます。
- ・活動前に、一度は頭の中でシミュレーションし、当日の動きや起こり得る危険をイメージしてみます。
- ・ケガや事故などは発生した場合に備えて、行動の流れ、連絡経路や最寄りの病院を把握し、フローチャートにより整理しておきます。

活動中に行うこと

- ・気候の変化に常に留意します。
- ・子どもたちに対して、活動に内在する危険についてしっかりと説明し理解させておきます。(この時、特に発達段階に応じた説明を心がけます)
- ・事故などが発生した場合には、発生時刻、発生状況、応急手当実施の有無とその内容を時系列に記録し、保護者や医療機関などへ報告できるようにしておきます。

活動後に行うこと

- ・実施した活動の内容を踏まえて、ケガや事故の有無にかかわらず、事前準備が足りていたかどうかをチェックします。万が一事故が起こった場合は、その原因についてももしっかり考えておくことが重要です。
- ・事故が起こった場合の記録を、事故記録簿としてまとめ、整理しておくとい良いでしょう。
- ・残した記録は、次年度以降も活用できるよう整理しておきます。

●まとめ

安全管理は段取り八分

より安全に活動するためには、事前準備がしっかりできているかが大きなポイントとなります。事前にしっかり準備していれば、当日に発生するケガや事故は激減します。

安全管理をすればするほど、子どもたちは自由に活動できます

大人が事前に危険な要素を把握し、対策をとっていることで、子どもたちの活動の幅は広がり、より多様な経験をすることができます。

それぞれの施設専用の安全管理マニュアルを作成しましょう

安全管理は、本などから得られる情報だけでは不十分です。活動する子どもや地域の特性によって、起こりうる危険は多様です。スタッフ間で話し合い、それぞれの施設専用の安全管理マニュアルを作成する必要があります。

参考資料

◎安全管理チェック表 イメージ

- 事前に下見をしている
 - 複数人でしている

- 安全点検表や注意すべきポイントを示した一覧表を作成している
 - スタッフ間で共有している

- 活動場所に生息する危険な植物や動物を把握している
 - スタッフ間で共有している

- 応急手当用品（救急箱）の準備をしている

- 最寄りの AED 設置場所を把握し、緊急時の使用法を理解している
 - スタッフ間で共有している

- ケガや事故発生時の対応フローチャートを作成している
 - スタッフ間で共有している

- 最寄りの病院を把握している
 - スタッフ間で共有している

- 保険に加入している

- 当日の天候をチェックしている

- 不審者情報、災害の警報は出ていないか

- 急な天候の変化に対応するための避難経路や避難場所を把握・確保している
 - スタッフ間で共有している

- 子どもごとにアレルギーや喘息、血液型などに関する情報を把握している
 - スタッフ間で共有している

- 活動前に子どもたちに安全管理面での指導を行っている

- 当日の活動行程をシミュレーションしている

◎活動別危険一覧表 イメージ

記入日：平成 年 月 日 記入者氏名（ ）

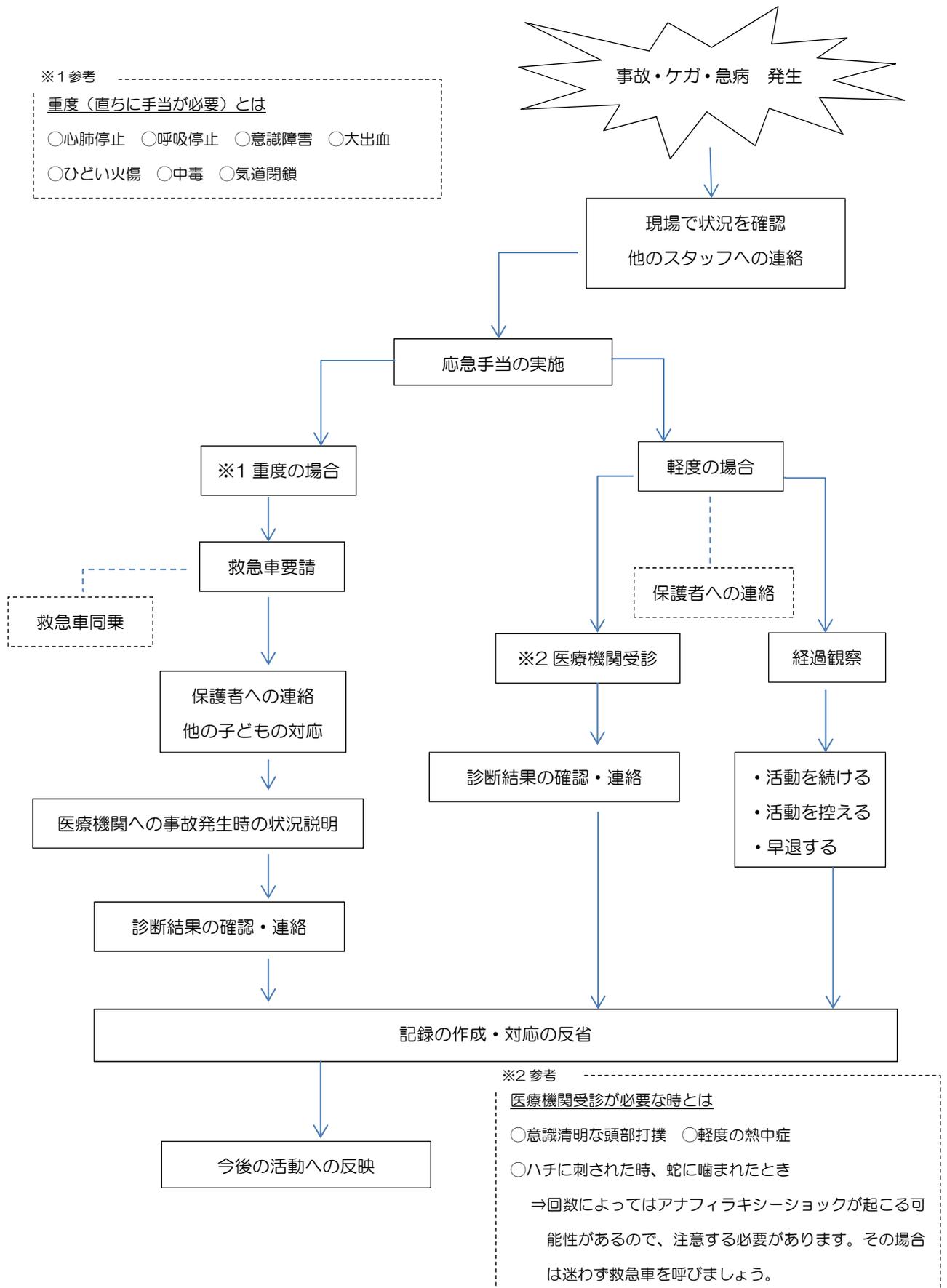
活動名：[]		
スタッフ：責任者 []		
参加園児：未満児 [名]、3歳児 [名]、4歳児 [名]、 5歳児 [名]、6歳児以上 [名]		
活動場所	危険な物・要素	対応・対策

◎救急車等への通報用カード イメージ

通報者	氏名： (団体名：)
活動場所 (住所)	
状況	
誰が	
いつ	
どうした	
応急処置の内容	
今の状況	

※活動場所の住所は事前に調べて記載しておくといでしょう。

◎ケガ・急病対応フローチャート イメージ



資料編

屋外で活動する際に便利な道具

屋外で保育活動をする際のお役立ちアイテムをご紹介します。

子どもが持っているといいもの

○レインコート

雨の日だけでなく、風があり寒い時にも寒さをしのげます。

○ビニール袋 2枚と替えの靴下

長靴の中に水が入ってしまった時は、濡れた靴下を脱いで乾いた靴下に替え、ビニール袋をかぶせて、その上に濡れた靴下を履いてから長靴を履きます。直接、肌に触れる所は乾いているし、ビニール袋のずれも防げます。

○レジャーシート

ランチタイムの敷物としてはもちろんですが、土手を滑る時にも使えます。

○軍手

土手を登る時、何かを運ぶ時、手を守ることができるのはもちろんですが、手袋人形にして子どもたちにメッセージを伝えることもできます。

○ルーペ

カップ型の物だと小さい子どもでも焦点を合わせやすく、動く虫も観察しやすいです。

○お手拭き

水がないところでも、子どもたちの手を拭いてあげられます。

保育者が持っているといいもの

[活動をより豊かにするために]

○おやつ

たくさん歩く時、子どもたちに疲れが見えたところで、ドライフルーツなど一口でも何か口に入れられると気分転換できて、また楽しく歩くことができます。非常食として準備しておくのも良いです。

○ナイフ、剪定ばさみ、のこぎり

子どもたちの基地作りやクラフトに使えます。また、のこぎりはカッターナイフのような物が良いです。リュックサックにも入れやすく、子どもたちも使いやすいです。

○白い布やタオル

自然物を観察する時に白い布に並べると観察しやすくなります。

○ヘッドライト

地面にあいた穴の中を照らすときに使えます。また、万が一、明るいうちに帰ってこられない場合に持っているとお心強いです。

[救急用として持っておくと安心]

○携帯用洗眼器

「目にゴミが入った」という訴えがある時、カエルを触った手で目をこすってしまった時には目を洗うことができます。

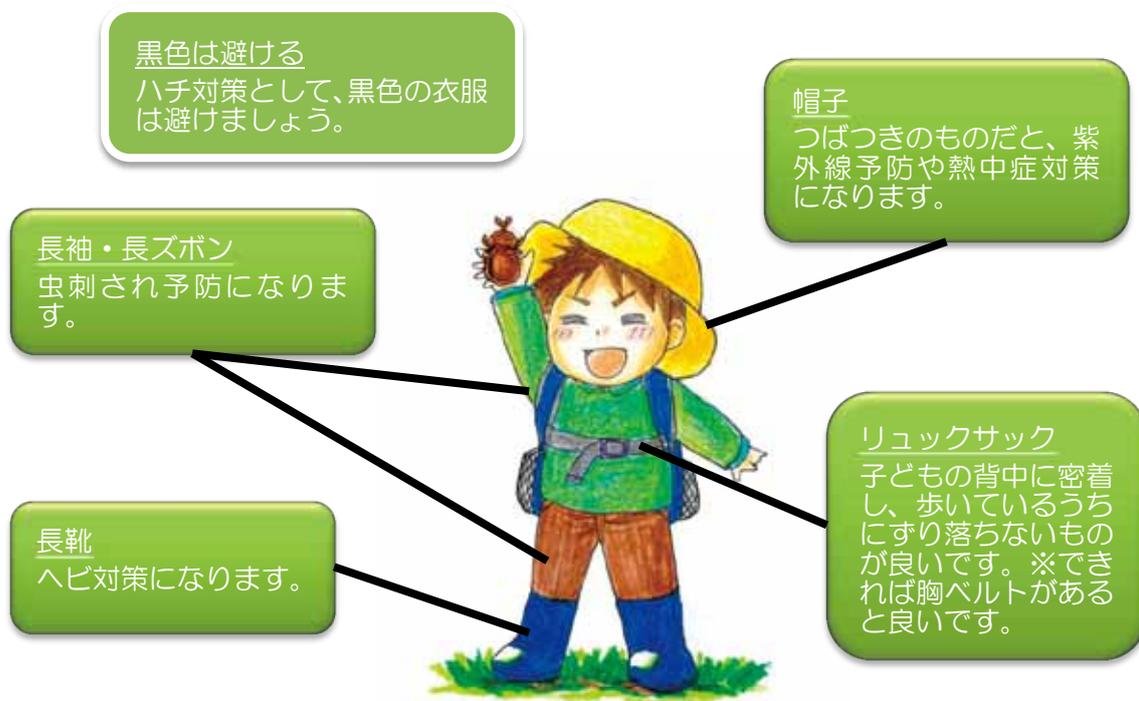
○針・とげ抜き

とげが刺さることもあるので、用意してあると便利です。



屋外へ出かける時の子どもの格好

●夏場の服装



●冬場の服装



信州型自然保育検討事業報告編

信州型自然保育検討委員会（敬称略）

委員長 上原貴夫（長野県短期大学 教授）
副委員長 木戸啓絵（岐阜聖徳学園大学短期大学部 専任講師）

委員 荒井聡史（長野県短期大学 准教授）
委員 飯島俊勝（長野県保育園連盟 会長）
委員 飯沼利雄（安曇野市 福祉部長）
委員 小林成親（NPO 法人山の遊び舎はらぺこ 職員）
委員 高松和子（飯田女子短期大学 教授）
委員 内藤美智子（松本短期大学 教授）
委員 本城慎之介（一般社団法人森のようちえんぴっぴ 保護者）
委員 宮原光生（長野県私立幼稚園協会振興対策経営委員会 副委員長）
委員 山口美和（上田女子短期大学 准教授）
委員 依田敬子（NPO 法人響育の山里くじら雲 代表）

信州型自然保育検討委員会 作業部会（敬称略）

部会長 上原貴夫（長野県短期大学 教授）
部会員 碓井幸子（清泉女学院短期大学 准教授）
部会員 山口美和（上田女子短期大学 准教授）

信州型自然保育ガイド イラスト（敬称略）

碓井幸子（清泉女学院短期大学 准教授）
畠山奈緒（上田女子短期大学 職員）

信州型自然保育検討委員会・作業部会における現地視察先（敬称略）

平成 26 年 5 月

野あそび保育 みっけ（飯田市）
おひさまクラブ幼稚園（上田市）
のびのび保育のすくすく園（上田市）
山の遊び舎 はらぺこ（伊那市）
里山保育 ひなたぼっこ（松本市）
響育の山里 くじら雲（安曇野市）
森のようちえん ぴっぴ（軽井沢町）
森のようちえん ちいろば（佐久穂町）
野外保育 森のいえ ぽっち（富士見町）
野外保育 風の森（大町市）
野外保育 森の子（安曇野市）
自由保育所 ひかりの子（安曇野市）
幼児教室 大地（飯綱町）
こどもの森幼稚園（長野市）

平成 27 年 2 月

みすず幼稚園（小諸市）
神田保育園（松本市）
すがだいら保育園（上田市）

平成 26 年 8 月

たんぼぼ保育園（御代田町）
小川村保育園（小川村）
認定こども園 円福幼稚園（長野市）
上田女子短期大学附属幼稚園（上田市）
西箕輪保育園（伊那市）

平成 26 年 12 月

認定こども園 吉田マリア幼稚園（長野市）
認定こども園 中野マリア幼稚園（中野市）
篠ノ井幼稚園（長野市）
南長野幼稚園（長野市）
東長野幼稚園（長野市）
俊英幼稚園（長野市）
たかやま保育園（高山村）
山の子保育園（松本市）
フレンド保育園（長野市）

◎現地視察並びに事例提供にご協力いただきました園におかれましては、心より感謝申し上げます。

信州型自然保育ガイド

平成 27 年（2015 年）3 月

発行：長野県 県民文化部 次世代サポート課

〒380-8570 長野市大字南長野字幅下 692-2

電話（026）232-0111 内線 2855

FAX（026）235-7087

E-mail：jisedai@pref.nagano.lg.jp



長野県